

Title	地域文化拠点としての公共ホールを構想するためのフレームワーク設計と評価
Sub Title	Design and evaluation of the framework for conception of local performing arts center
Author	吉原, 早紀(Yoshihara, Saki) 当麻, 哲哉(Toma, Tetsuya)
Publisher	慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
Publication year	2015
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2015年度システムエンジニアリング学 第218号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002015-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002015-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文

2015 年度

地域文化拠点としての  
公共ホールを構想するための  
フレームワーク設計と評価

吉原 早紀

(学籍番号：81433548)

指導教員 准教授 当麻 哲哉

2016 年 3 月

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科  
システムデザイン・マネジメント専攻

Design and Evaluation of  
the Framework for Conception of  
Local Performing Arts Center

Saki Yoshihara

(Student ID Number : 81433548)

Supervisor Tetsuya Toma

March 2016

Graduate School of System Design and Management,  
Keio University  
Major in System Design and Management

# 論 文 要 旨

学籍番号	81433548	氏 名	吉原 早紀
論文題目：  地域文化拠点としての公共ホールを構想するためのフレームワーク設計と評価			
(内容の要旨)  本研究の目的は、地域文化拠点としての公共ホールのコンセプトデザインにおいて、デザインされる公共ホールと、デザインを行う主体であるコンセプトデザインチームという二つの対象について、全体像を体系的に把握するために必要な視点を整理したフレームワークを設計し、評価することである。 国や地方自治体が設置するホール施設である公共ホールは、主に貸し施設として運用されてきたものが多く、その計画において様々な用途に耐えうることが重要視されたために多目的ホールが採用される傾向にあった。2012年の「劇場、音楽堂等に関する法律」（劇場法）の施行により劇場、音楽堂等の地域文化拠点としての役割が法律上初めて明確化されたことで、近年、公共ホールも地域への貢献のあり方をより考慮したデザインが求められるようになってきている。しかし、すでに多くの過去事例があり参考にしやすい多目的ホールとは異なり、劇場法に沿ったホールを実際にどのようにデザインするかは多くの地方自治体にとって課題となっている。地域文化拠点としてデザインされた公共ホールのモデルとなる事例はさほど多くない上に、一部の勘や経験の優れた人々によってデザインされてきたため、事例の報告はあってもそれを応用するのは難しいという現状がある。 本研究では、公共ホールと置かれた地域との関係性を考え、それをホールの設計にまで反映するためには、公共ホールを体系的に捉え、体系的な理解のもとでコンセプトデザインを検討することが有効であると考え、地域文化拠点としての公共ホールのコンセプトデザインの構造を分析し、その結果からフレームワークを設計した。構造分析の対象は、デザインされる公共ホールと、デザインする主体であるデザインチームである。そして構造分析の結果から整理した視点をフレームワークとして設計し、有識者へのインタビューにより評価を行った。 結果として、フレームワークは公共ホールデザインを体系的に捉えていることが確認できた。加えて、その活用方法として、地方公共団体の職員の意識を底上げすることに有効であるという意見が得られた。ただし、利用に関しては、実際にどのようにフレームワークを利用するかが見えにくいという声もあったため、今後の展望としては、現場の制約を考慮し、利用方法の検討を進めることが望まれる。			
キーワード（5語）  公共ホール， 地域の文化拠点， 基本構想， フレームワーク， システムズエンジニアリング			

## SUMMARY OF MASTER'S DISSERTATION

Student Identification Number	81433548	Name	Saki Yoshihara
Title			
Design and Evaluation of the Framework for Conception of Local Performing Arts Center			
Abstract			
<p>The purpose of this research was to design and evaluate the framework that organizes viewpoints required to understand the system architecture of designing local performing arts center. Conception of the local performing arts center was considered a system consists of two components, the local performing arts center itself and the concept design team.</p> <p>Local performing arts centers are facilities having one or more halls installed in the national and local governments are those specially culture arts as a main objective. Many local performing arts centers, which have been operated as rental facilities tended to multipurpose hall formats had been adopted because it had been important to withstand the various applications in the plan. However, by enforcement of the theater of the law in 2012, it has come to be required to design considering the contribution to the local community. How to design a hall along the theater law is a challenge for many local governments.</p> <p>In this study, local performing arts center was seen as a system, viewpoints of the system were designed from the perspective of becoming a cultural hub of the local community. And it was designed to organize viewpoints as a framework.</p> <p>For the evaluation of the framework, by interviewing, it was confirmed to be possible to comprehensively grasp designing local performing arts center by the framework, and that there are understandability, availability, effectiveness for people involved in the design local performing arts center.</p>			
Key Word(5 words)			
Public hall, Local Performing Arts Center, Basic concept plan, Framework, Systems Engineering			

# 目次

<b>1. 序論</b> .....	<b>1</b>
1.1. 研究背景 .....	1
1.2. 研究目的 .....	1
1.3. 本論文の構成 .....	2
1.4. 用語一覧 .....	3
<b>2. 公共ホール計画の現状と課題</b> .....	<b>4</b>
2.1. 公共ホールと公共ホール計画 .....	4
2.1.1. 公共ホールの概念と定義 .....	4
2.1.2. 公共ホール計画の概要 .....	5
2.1.2.1. 公共ホール計画の機会と対象 .....	5
2.1.2.2. 公共ホール計画の基本的な流れ .....	6
2.1.2.3. 公共ホール計画の関係者 .....	7
2.2. 公共ホールと公共ホール計画の変遷 .....	8
2.2.1. 公共ホールの変遷 .....	8
2.2.2. 求められる公共ホール計画の変遷 .....	10
2.3. 公共ホール計画の課題 .....	12
2.4. 公共ホール計画の先行研究 .....	13
2.5. 本研究の新規性とスコープ .....	14
2.5.1. 本研究の新規性 .....	14
2.5.2. 本研究のスコープ .....	14
2.5.2.1. 設置主体 .....	14
2.5.2.2. コンセプトのデザイン .....	15
2.5.2.3. 地域の文化拠点 .....	16
<b>3. 公共ホールとコンセプトデザインチームの構造分析</b> .....	<b>17</b>
3.1. システムズエンジニアリングとシステムアーキテクチャ .....	17
3.2. 対象とするシステムの特典 .....	18
3.3. 公共ホールの構造分析 .....	18
3.3.1. 公共ホールの目的の設定 .....	19
3.3.2. 公共ホールのライフサイクルの設定 .....	19
3.3.3. 公共ホールのステイクホルダーの設定 .....	19
3.3.4. コンテキストからの構造分析 .....	20

3.3.4.1.	コンテキスト分析 .....	20
3.3.4.2.	要求機能の洗い出し .....	21
3.3.4.3.	機能設計 .....	23
3.3.4.4.	物理設計 .....	24
3.4.	コンセプトデザインチームの構造分析 .....	26
3.4.1.	コンセプトデザインチームの目的の設定 .....	26
3.4.2.	事例概要 .....	26
3.4.3.	事例からの構造分析 .....	28
3.4.3.1.	機能設計 .....	28
3.4.3.2.	物理設計 .....	29
<b>4.</b>	<b>    フレームワークの設計 .....</b>	<b>35</b>
4.1.	設計結果 .....	35
4.1.1.	フレームワーク概要 .....	35
4.1.2.	公共ホールを考えるフレームワーク .....	36
4.1.3.	公共ホールのコンテキスト一覧 .....	37
4.1.4.	コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク .....	37
4.2.	フレームワークの要求分析 .....	39
4.3.	フレームワークの設計過程 .....	40
4.3.1.	公共ホールを考えるフレームワークの設計過程 .....	40
4.3.1.1.	視点の整理 .....	40
4.3.1.2.	「目的の視点」の検討 .....	41
4.3.1.3.	「機能の視点」の検討 .....	41
4.3.1.4.	「物理の視点」の検討 .....	42
4.3.2.	コンセプトデザインチームを考えるフレームワークの設計過程 .....	42
4.3.2.1.	視点の整理 .....	42
4.3.2.2.	「目的の視点」の検討 .....	43
4.3.2.3.	「機能の視点」の検討 .....	43
4.3.2.4.	「物理の視点」の検討 .....	44
4.4.	フレームワークの活用例 .....	45
4.4.1.	フレームワークに従って考えるガイド .....	45
4.4.2.	ガイドへのレビュー .....	54
<b>5.</b>	<b>    フレームワークの評価 .....</b>	<b>56</b>
5.1.	評価の目的と方法 .....	56
5.2.	有識者インタビューによる評価 .....	56

5.2.1. 有識者インタビュー結果 1 .....	56
5.2.1.1. 属性情報 .....	56
5.2.1.2. 評価結果 .....	57
5.2.2. 有識者インタビュー結果 2 .....	58
5.2.2.1. 属性情報 .....	58
5.2.2.2. 評価結果 .....	58
5.2.3. 有識者インタビュー結果 3 .....	59
5.2.3.1. 属性情報 .....	59
5.2.3.2. 評価結果 .....	59
5.3. 考察 .....	60
<b>6. 結論と今後の展望 .....</b>	<b>62</b>
6.1. 結論 .....	62
6.2. 今後の展望 .....	62
<b>謝辞 .....</b>	<b>63</b>
<b>参考文献・資料リスト .....</b>	<b>64</b>



## 図表目次

図 1-1	本研究の目的.....	2
図 2-1	公共ホール計画の基本的な流れ.....	7
図 2-2	公共ホール計画の関係者.....	8
図 2-3	公共ホール計画の関係者の変遷.....	12
図 2-4	地域の文化拠点としての公共ホールの分析.....	16
図 3-1	「公共ホールのコンセプトデザイン」の構成要素.....	18
図 3-2	典型的なシステムライフサイクルステージ.....	19
図 3-3	公共ホールのライフサイクル.....	19
図 3-4	公共ホールのライフサイクルと主なステイクホルダー.....	20
図 3-5	公共ホールのコンテキスト（利用・サポートステージ）.....	21
図 3-6	公共ホールの物理の構造的な表現.....	25
図 3-7	コンセプトデザインチームの機能の構造的な表現.....	30
図 3-8	コンセプトデザインチームの機能の動的な表現.....	31
図 3-9	コンセプトデザインチームの物理の構造的な表現.....	32
図 3-10	コンセプトデザインチームの物理の動的な表現.....	33
図 3-11	コンセプトデザインチームの機能の動的な表現とやり取りされる要素.....	34
図 4-1	フレームワークの全体像.....	35
図 4-2	公共ホールを考えるフレームワーク.....	36
図 4-3	公共ホールのコンテキスト一覧（再掲）.....	37
図 4-4	コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク.....	38
図 4-5	フレームワークのユーザーの定義.....	39
図 4-6	フレームワークのユースケース図.....	40
図 4-7	公共ホールのシステムアーキテクチャの基本とする視点.....	41
図 4-8	公共ホールの目的の視点.....	41
図 4-9	公共ホールの機能の視点設計結果.....	41
図 4-10	公共ホールの制約の視点設計結果.....	42
図 4-11	公共ホールの制約の視点設計結果.....	42
図 4-12	コンセプトデザインチームのシステムアーキテクチャの基本とする視点.....	43
図 4-13	コンセプトデザインチームの目的の視点.....	43
図 4-14	公共ホールのコンテキスト（基本構想・基本計画ステージ）.....	44
図 4-15	コンセプトデザインチームの機能の視点設計結果.....	44
図 4-16	コンセプトデザインチームの物理の視点設計結果.....	45
図 4-17	フレームワークに従って考えるガイドの全体像.....	46

図 4-18	フレームワークに従って考えるガイド表①	47
図 4-19	フレームワークに従って考えるガイド表②	48
図 4-20	具体例：利用者・市民の要望を整理するガイドの全体像	48
図 4-21	具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表①	50
図 4-22	具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表②	51
図 4-23	具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表①記入例	52
図 4-24	具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表②記入例	53
図 4-25	具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド使用イメージ	54

表 1-1	本論文における用語の一覧 .....	3
表 2-1	公共ホール計画の機会（筆者作成） .....	6
表 2-2	公共ホールの設置主体別分類（筆者作成） .....	15
表 3-1	公共ホールの要求機能 .....	22
表 3-2	公共ホールの機能の構造的な表現 .....	23
表 3-3	公共ホールの制約条件 .....	24
表 3-4	公共ホールの物理の構造的な表現 .....	26
表 3-5	コンセプトデザインチームの構造分析に用いた資料一覧 .....	28
表 4-1	ガイドへのレビュー（市職員） .....	55
表 4-2	ガイドへのレビュー（管理運営団体職員） .....	55
表 5-1	評価についてのインタビュー（市職員） .....	57
表 5-2	評価についてのインタビュー（管理運営団体職員） .....	58
表 5-3	評価についてのインタビュー（公共ホールデザインのアドバイザー、館長） .....	60

# 1. 序論

本章では序論として、まず研究の背景を概観した上で、本研究の目的を示す。そして、本論文の構成と、論文中で用いられる用語を一覧にして整理する。

## 1.1. 研究背景

日本における公共ホールの主流は、日比谷公会堂などに端を発する集会施設から、多目的ホールへと変化し、より舞台芸術の各分野に特化した専用ホールへの変遷を経て、近年、新たな局面へと達している。

顕著な出来事は、2012年の「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」(劇場法)<sup>[1]</sup>の施行である。劇場法は、法律上初めて公共ホールを含めた「劇場、音楽堂等」の役割を明示した。そこでは、劇場、音楽堂等は「地域の文化拠点」となるべきであると述べられている。

一方で、多くの公共ホールが立地する地域における価値を明確に打ち出せていないことが指摘されている<sup>[2][3]</sup>。明確に打ち出せている例は、一部の勘や経験の優れた人々の参加によってデザイン(構想)活動が行われている。しかし、そのような勘や経験が優れた人々がいつも確保できるとは限らず、公共ホールの設置主体である地方自治体が主体的に公共ホールのデザイン活動に携わる必要があると言える。

劇場法の要請に応え、「地域の文化拠点」となる公共ホールをデザインするためには、公共ホールと置かれた地域との関係性を考慮して、個々のホールへの要求事項を見出し、いく必要がある。また、その際に、専門家だけでホールをデザインするのではなく、時には市民参加も求められる。さらに、そのようにして得た要求事項を、ホールの詳細設計まで反映する必要がある。

公共ホールと置かれた地域との関係性を考え、それをホールの設計にまで反映するためには、公共ホールを体系的に捉えることが有効である。勘や経験の優れた人々によってデザインされた例をみると、このようなことができていることがわかる。しかし、公共ホールを体系的に捉えた研究はない。

## 1.2. 研究目的

本研究の目的は、公共ホールを体系的に捉える方法の一つとして、システムズエンジニアリングの考え方をを用いて、地域の文化拠点として機能する公共ホールの構造を明らかにし、今後の公共ホールデザイン活動の際に参考にできるよう、構造を適度な抽象度で記述したフレームワークを設計することである。

本研究で設計したフレームワークにより、地方自治体の職員をはじめとした、公共ホールデザインに携わる人々が、どう考えればよいのかがわかりやすくなることや、過去の事例を構造的に把握しやすくなることが期待される。

図 1-1 は以上を表したものである。

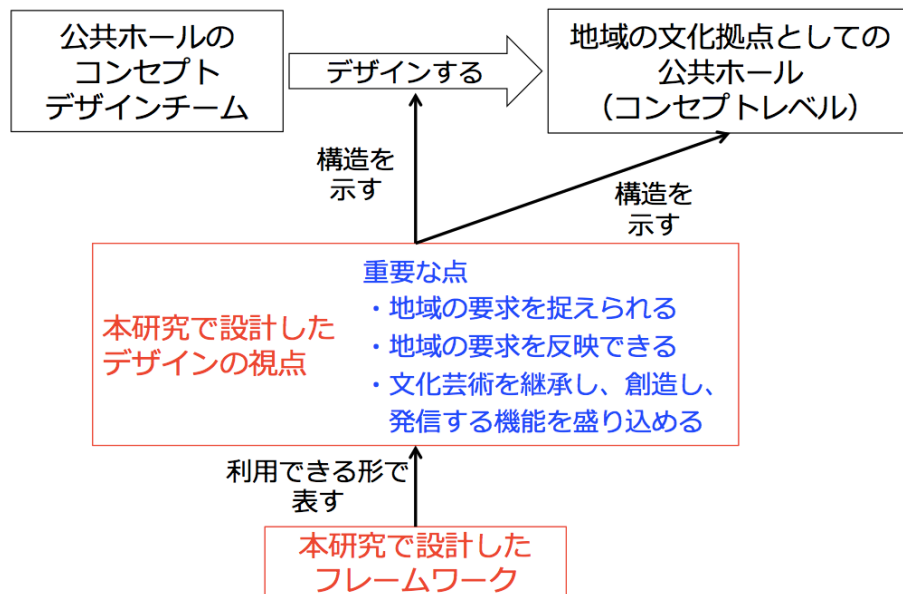


図 1-1 本研究の目的（筆者作成）

### 1.3. 本論文の構成

本論文の構成について説明する。

第 1 章では、序論として、まず研究の背景を概観した上で、本研究の目的を示した。そして、本論文の構成と、論文中で用いられる用語を一覧にして整理を行った。

第 2 章では、公共ホールの概念と定義を述べ、公共ホール計画の概要について説明する。次に、歴史的な流れとしての公共ホールの変遷と、それに伴った公共ホール計画の変遷を記す。その後、公共ホール計画の課題を述べ、公共ホール計画の先行研究を紹介する。最後に、本研究の新規性とスコープについて述べる。

第 3 章では、公共ホールを体系的に捉えるために行った公共ホールとコンセプトデザインチームの構造分析について示す。まず、システムズエンジニアリングとシステムアーキテクチャの概念について説明する。次に、対象とするシステムとして、デザインされる公共ホールとデザインする主体であるコンセプトデザインチームを設定したことを述べる。そして、公共ホールの構造分析の過程と結果を示した後で、コンセプトデザ

インチームの構造分析の過程と結果を示す。

第4章では、フレームワークの設計結果とその導出過程について説明する。設計にあたり、第3章で明らかにした公共ホール、公共ホールデザインチームの構造を適切な抽象度で記述した。

第5章では、設計結果であるフレームワークに対する有識者のインタビューを要約した上で、考察を述べる。

第6章では、本論文の結論と今後の展望について記す。

## 1.4. 用語一覧

表 1-1 は、本論文中で用いられる主な用語の定義を一覧にしたものである。「頁」の列は、その用語の定義が述べられているページ数を示している。

表 1-1 本論文における用語の一覧

用語	本論文における定義	頁
公共ホール	地方自治体が設置主体であり、舞台及び客席や舞台設備等を有し、舞台芸術の公演などを行うホールを持つ施設	P4
地域文化拠点としての公共ホール	公共ホールのうち、劇場法の対象となるもの	P4
公共ホールの計画	建物や設備等のハード面、制度や運営等のソフト面、周辺との関係における役割の検討等を含めた公共ホール全体の計画	P5
コンセプト	公共ホールの計画プロセスにおける「基本構想・基本計画」程度の詳細度の計画	P15
デザイン	公共ホールのコンセプトを検討すること	P15
コンセプトデザインチーム	公共ホールのコンセプトのデザインを行うチーム（個人の場合もある）	P18

## 2. 公共ホール計画の現状と課題

本章では、まず、公共ホールの概念と定義を述べ、公共ホール計画の概要について説明する。次に、歴史的な流れとしての公共ホールの変遷と、それに伴った公共ホール計画の変遷を記す。その後、公共ホール計画の課題を述べ、公共ホール計画の先行研究を紹介する。最後に、本研究の新規性とスコープについて述べる。

### 2.1. 公共ホールと公共ホール計画

#### 2.1.1. 公共ホールの概念と定義

公立のホール機能を備えた施設を指す名称は、「公共ホール」「公立ホール」「公立文化施設」「文化会館」「公立劇場」などさまざまに用いられている。公的な定義が存在しないため、言葉の示す範囲は研究や書籍によって微妙に異なっている。例えば、社団法人全国公立文化施設協会<sup>[4]</sup>は「公立文化会館」という言葉を用い、「音楽、演劇、舞踊、映画など文化芸術事業のための設備を有する施設」を指しており、加藤ら<sup>[5]</sup>は「公立文化ホール」という言葉を用い、「ホールを有し、主に舞台芸術活動に利用される公の文化施設」を指している。

本研究では一般に広く用いられている名称である「公共ホール」を採用する。研究によっては、地域の公共の利益に供するような「公共性」を持っているようなホールを指し、民間のホールを含めて「公共ホール」としている例もある。しかし、本研究では、公立のホールの課題を扱うため、地方自治体によって設置された公立のホールのみを指す言葉として用いることとする。

公共ホールの定義としては、2014年の一般財団法人地域創造の調査<sup>[6]</sup>における「ホール」に準じ、公立の「舞台及び客席や舞台設備等を有し、舞台芸術の公演などを行うホールを持つ施設」とする。特に本研究では、劇場法の対象となるようなものを扱い「地域文化拠点としての公共ホール」とする。

以上をまとめると、本研究の対象とする地域文化拠点としての公共ホールは以下の三点を満たすものであると言える。

- ・ 地方自治体が設置主体である
- ・ 舞台、客席、舞台設備等を有する施設である
- ・ 劇場法の定める「劇場・音楽堂等」である

具体的には、公立のコンサートホール、劇場などが該当する。公立のメッセや体育館

は含まない。地域創造の同調査によると、このような施設は全国で1,490以上存在する<sup>[6] \*1</sup>。2014年4月時点の全国の市町村数が1,718である<sup>[7]</sup>ことから、おおよそ各市町村に1つ公共ホールがあることになる。

## 2.1.2. 公共ホール計画の概要

本項では、公共ホール計画の概要について説明する。なお、「計画」とは、建物や設備等のハード面のみでの計画ではなく、制度や運営等のソフト面や、周辺との関係における役割の検討等を含めた公共ホール全体の計画を指す。

### 2.1.2.1. 公共ホール計画の機会と対象

公共ホールを計画する機会は、その計画の対象から「大規模改修・建て替え・新設」「設備更新」「運営見直し」に大別できる。表2-1は公共ホール計画の機会とその対象について示した表である。

「大規模改修・建て替え・新設」の際は、建物や設備等のハード面、制度や運営等のソフト面双方について計画を行う。新設は、ゼロから新しく公共ホールをつくる場合である。建て替えは、現在ある公共ホールを取り壊して新しく公共ホールをつくる場合である。大規模改修とは、現在ある公共ホールに大規模な改修を加える場合である。

「設備更新」の際は、主にハード面について計画を行う。ソフト面についても検討する場合もある。設備更新は、現在ある公共ホールの設備を見直す場合である。

「運営見直し」の際は、ソフト面について計画を行う。

本研究では、ハード面、ソフト面を含めて公共ホールを体系的に捉えることを目的としている。なるべく議論を単純化するため、新設や、新設に準ずるような建て替え、大規模改修の場合を想定する。

---

\*1 地域創造の調査では「ホール」を舞台芸術の上演を主目的とした「専用ホール」（本論文中で後述の専用ホールとは別の定義）とそうではない「その他ホール」に分けている。1,490という数字は、本研究における「地域文化拠点としての公共ホール」を、同調査の「専用ホール」にほぼ同義と見立てたもの。



表 2-1 公共ホール計画の機会（筆者作成）

計画の機会 計画対象	大規模改修・ 建て替え・新設	設備更新	運営見直し
ハード面 (建物・設備)	○	○	
ソフト面 (制度・運営)	○	△	○

○：特に対象とする △：対象とすることもある  
無印：ほとんどの場合対象としない

### 2.1.2.2. 公共ホール計画の基本的な流れ

公共ホール計画は、多くの地方自治体で概ね似たような流れでなされている。公立施設に関する行政資料<sup>[8][9][10]</sup>から、ハード面については「企画」「基本構想」「基本計画」「基本設計」「実施設計」「施行」、ソフト面については加えて「運営基本計画」「運営実施計画」「開館準備」といった段階があることがみて取れる。

ただし、その各段階の呼び方や詳細度は地方自治体により異なっており、各段階をどのように行うかも事例により異なっている。

半澤ら<sup>[11]</sup>は公共ホールの計画プロセスの段階を、より大まかに「企画」「計画」「設計」「施行」の4段階とし、それぞれ以下のように定義している。

- ・ 企画：予算や建築規模といった建築の概要や竣工後の運営についての検討、また、土地の地理的条件や地域が抱える問題に対する可能性を検討する段階
- ・ 計画：企画段階で設定された条件をさらに詳細に検討を行い、建築の具体的、全体的なイメージを構想する段階
- ・ 設計：建築における全体は一から建築の詳細な部分までに形と機能を与え、全体を整理していく段階
- ・ 施行：設計の後、実際に建築し形作る段階

図 2-1 は、半澤ら<sup>[11]</sup>による計画プロセスの定義、財団法人地域創造の調査<sup>[12]</sup>、公立施設に関する行政資料<sup>[8][9][10]</sup>、建築士事務所協会のウェブサイト<sup>[13]</sup>をもとに作成した公共ホール計画の基本的な流れである。ハード面とソフト面の両方について流れを記載した。

まず、地方自治体の内部で「企画」段階が行われ事業が立ち上げられる。

次に「計画」段階が基本構想や基本計画という形でなされ、ドキュメントとして作成される。そしてハード面については設計者が選定される。

「設計」段階として、基本設計（ハード面）、運営基本計画（ソフト面）がなされる。その際、ハード面については基本設計図書がドキュメントとして作成される。さらにそれを詳細化した実施設計（ハード面）、運営実施計画（ソフト面）がなされ、ハード面については実施設計図書がドキュメントとして作成される。そのあとでハード面については施工者が選定される。

「施行」段階は、施行（ハード面）、開館準備（ソフト面）がなされる。

そして計画が終了し、開館にいたる。

	建設関係 (ハード面)	制度・運営関係 (ソフト面)	内容
企 画	企画		現状把握、概略の機能・規模・施設内容・事業費の検討、方針の決定
計 画	基本構想・基本計画		基本理念を定め、事業の大枠、施設概要などを決定、設計与件をまとめる
設 計	設計者選定		基本構想・基本計画をもとに、設計者を選定
	基本設計	運営基本計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>設計者が基本設計図書をまとめる</li> <li>運営組織、実施事業の検討</li> </ul>
	実施設計	運営実施計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>設計者が基本設計図書をもとに詳細な設計を進め、実施設計図書を作成</li> <li>運営組織の選定（立ち上げ）</li> </ul>
	施工者選定		実施設計図書をもとに、施行者を選定
施 行	施行	開館準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>施行者が建設を行う</li> <li>事業仕込み、人材育成</li> </ul>

図 2-1 公共ホール計画の基本的な流れ（筆者作成）

### 2.1.2.3. 公共ホール計画の関係者

公共ホール計画の関係者は、大きく分けて「設置者」「設計者」「施工者」「管理運営者」「利用者・市民」がいる。図 2-2 は公共ホール計画の関係者を示したものである。

「設置者」は公共ホールの場合には地方自治体である。「設計者」は建築事務所等である。「施工者」は工事施行会社等である。「管理運営者」は、指定管理で管理運営が行

われる場合には指定管理団体、地方自治体の直営の場合は地方自治体と、音響・照明・舞台機構等の技術者等である。

2.1.2.2 で示した基本的な流れのどの段階にどの関係者が関わるかは、各事例によって大きく異なっている。

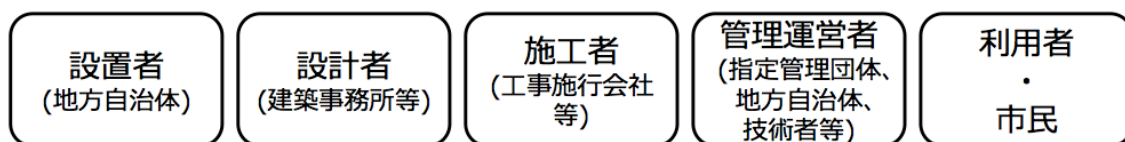


図 2-2 公共ホール計画の関係者 (筆者作成)

## 2.2. 公共ホールと公共ホール計画の変遷

### 2.2.1. 公共ホールの変遷

公共ホールの主流は、集会施設から始まり、副次的に多様な分野の文化芸術の上演も行えるようにつくられた多目的ホール、音楽や演劇など文化芸術の各分野により特化した専用ホールへの変遷を経て、近年、新たな局面を迎えている。

日本における公共ホールは、1918 年に開館した大阪市中央公会堂<sup>\*2</sup>や、1929 年に開館した日比谷公会堂<sup>\*3</sup>に端を発し、それらの名にも残るように「公会堂」として歴史が始まった。日比谷公会堂は、広さを持った舞台を備え、舞台芸術の上演もできるような施設であったが、行事や講演会に用いられることを主な目的とした集会施設であった<sup>[4]</sup>。

その後、1970 年代ごろから「モノの豊かさ」から「ココロの豊かさ」へと価値観が移行していくのと時を同じくして公共ホールが増加し<sup>[4]</sup>、この頃に、集会施設から音響や照明、舞台機構等の幅を広げ、文化芸術の上演も含めた多様な利用形態に応えることのできることを目指した多目的ホールも多く作られた。

一方で、多目的であるがゆえに逆に使い勝手が悪いという意見も見られるようになり、「多目的ホールは無目的ホール」と揶揄された時代<sup>[4]</sup>を経て、1980 年頃からバブル経済とも相まって本格的な舞台芸術の実演が可能な専用ホールが生まれるようになった。専用ホールとは、「音楽専用ホール」や「演劇専用ホール」といった形で文化芸術の各分野に特化したホールである。

バブル経済崩壊後、地方自治体の財政状況が厳しくなり、さらに少子高齢化社会によ

\*2 大阪市中央公会堂：大阪市北区に位置する。通称中之島公会堂。1918 年開館。

\*3 日比谷公会堂：東京都千代田区の日比谷公園内に位置する。1929 年開館。

る税込減で、予算面から地方自治体の文化芸術事業の意義が問い直されている。その結果が、「地域活性化への貢献や市民参加、文化芸術の普及などに着目し、地域との連携を意識した活動を行う」公共ホールの増加<sup>[4]</sup>という近年の傾向である。

この近年の傾向に対し、佐藤信<sup>[15]</sup>は、これまで数々の劇場、公共ホールの計画に携わってきた経験から、今後は劇場、公共ホールが「プロと市民、どちらも満足して使える建物」であることが求められるとしている。

平田オリザ<sup>[16]</sup>らは、地域コミュニティの崩壊の問題と関連付けて、劇場や公共ホールの社会包摂（Social Inclusion）\*<sup>4</sup>機能を唱えている。社会包摂とは、「誰もが、社会、地域社会の一員として包括され、生きがいを持って生活することのできる状態のことであり、それを目指す概念、考え方」<sup>[17]</sup>である。平田は、どのような人々でも受け入れるという文化芸術の特性を生かし、公共ホールが、置かれる地域で人々の緩やかな交流を促す場となることで、地域コミュニティの再生にとって重要な役割を果たすとしている。

さらに、2012年の「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（劇場法）施行は、公立、民間含めホール関係者にとって大きな出来事となった。劇場法は公共ホールが地域との連携を意識した活動を行う近年の傾向を後押ししている。その成立にあたっては平田オリザも尽力しており、劇場法前文には「新しい広場」という文言で劇場、ホールの社会包摂機能の考え方が表現されている。

これまで公共ホールには、博物館・美術館にとっての「博物館法」<sup>[18]</sup>、図書館にとっての「図書館法」<sup>[19]</sup>のように文化を担う存在としての根拠となる法律が無く、地方自治体は「地方自治法」<sup>[20]</sup>の「公の施設」\*<sup>5</sup>の記述を根拠に公共ホールの設置、運営を行っていた。劇場法は、法律上初めて文化芸術を担う存在としての公共ホールの役割を示したものである。以下はその定義の一部である。

劇場、音楽堂等は、文化芸術を継承し、創造し、及び発信する場であり、人々が集い、人々に感動と希望をもたらし、人々の創造性を育み、人々がともに生きる絆を形成するための地域の文化拠点である

現代社会においては、劇場、音楽堂等は、人々の共感と参加を得ることにより「新し

---

\*<sup>4</sup> 社会的包摂、社会包括、社会的包括、ソーシャルインクルージョン等とも呼ばれる。

\*<sup>5</sup> 「普通地方公共団体は、住民の福祉を増進する目的を持ってその利用に供するための施設（これを公の施設という。）を設けるものとする」（地方自治法第244条第一項）

い広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能も期待されている

全ての公共ホールが「劇場、音楽堂」に当てはまるとは明記されていないが、地方自治体に設置されているという性質上、公共ホールもこの法律に沿って構想されることが見込まれている。実際に筆者が公共ホールの運営団体職員に劇場法への意識に関するインタビューを行ったところ、以下のコメントが得られた\*<sup>6</sup>。

「劇場法の影響は確実に受けている。区から指定管理を受けている立場として、約5年に一度、契約更新がある。区からの要望や、団体からの提案を出す。そのような時に、劇場法は法律なので、乗らなければならない一つの基準である。また、文化庁は劇場法を下地にしているので、国からの補助金を得る際など意識する」

こうした発言からも、劇場法の公共ホールへの影響がうかがえる。

### 2.2.2. 求められる公共ホール計画の変遷

公共ホールの変遷とともに求められる公共ホール計画のあり方も変化してきている。

多目的ホールが主流であった頃は、多様な利用形態に応えることを目指す公共ホール計画が主であり、他の事例を参考にすることも容易であった。数々の公共ホールの計画に携わってきた大石時雄は、筆者のインタビュー\*<sup>7</sup>に応え、この頃の公共ホール計画を「行政だけで計画を行うことができた」と述べた。

専用ホールが主流になってくるに従い、文化芸術の特定の分野の使用に特化してより高度な音響、照明、舞台機構などを目指す公共ホール計画に移行していった。大石は同インタビューにおいて「設計・建築、運営の専門家を含めた計画が必要になってきた」と説明した。

本研究の対象とする地域文化拠点としての公共ホールの計画においては、公共ホールと地域との関係がより考慮されなければならない。

---

\*<sup>6</sup> 筆者による東京都公共ホール管理運営団体職員へのインタビュー（2015年12月22日）

\*<sup>7</sup> 筆者によるいわき芸術文化交流館（いわきアリオス）支配人大石時雄へのインタビュー（2015年2月1日）

佐藤信<sup>[21]</sup>は、こうした流れや劇場法の要請を受け、公共ホールの概念は変化の時期にあるとし、以下を指摘している。

- ・ いままでは「公の施設」に事業を取り込むことが焦点となってきたが、「地域を活性化させる」ことと両立させて公共ホールそのものの位置付けを考えなければならない
- ・ ハード面では、「公の施設」としての貸し館中心の公共ホールから、劇場法に 대응するために事業をつくりださなければいけないので、施設内容が変わってくる
- ・ ソフト面では、「貸し館事業」と「劇場、音楽堂としての事業」の2つの事業の並立が必要になり、従来 of 公共ホールとは違う組織体制の制度が求められる

こうしたことを考えるにあたり、現在のところ、国内にモデルケースは少なく、どのように計画を進めるかを都度検討しながら公共ホールへの要求事項を設定しなければならないことが指摘されている<sup>[22]</sup>。大石は、同じくインタビューにおいて、「行政、設計・建築、運営の専門家のみならず、計画に市民の参加が生じた」と指摘した。

求められる公共ホール計画の変遷を、計画に関わるものが求められる主な関係者からまとめたものが、図 2-3 である。大石の語った「行政」「設計・建築の専門家」「運営の専門家」「市民」を 2.1.2.3 の図 2-2 で示した公共ホール計画の関係者と対応させ、作成した。つまり、大石の語った「行政」を設置者（地方自治体）、「設計・建築の専門家」を設計者（建築事務所等）と施工者（工事施行会社等）、「運営の専門家」を管理運営者（指定管理団体、地方自治体、技術者等）、「市民」を利用者・市民として、多目的ホールの場合、専用ホールの場合、地域文化拠点の場合においてそれぞれ関わりが求められる関係者を黄色で示したものである。なお、これまでのすべての多目的ホール、専用ホール、地域文化拠点としての公共ホールの計画がこの通りに行われていたことを示すものではなく、傾向を表していることを注記しておく。

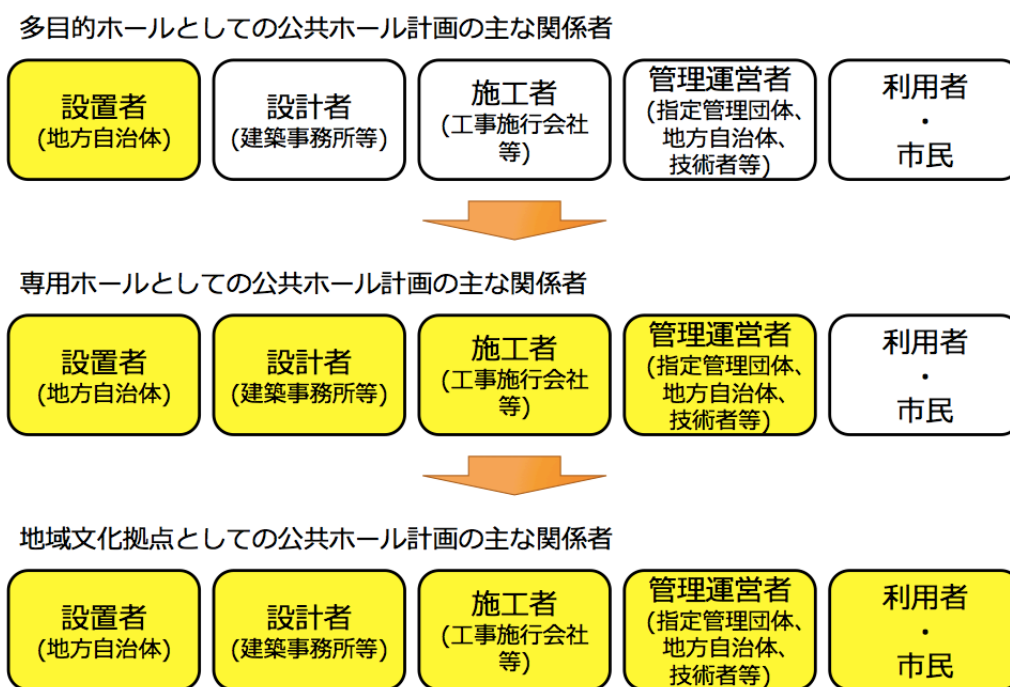


図 2-3 公共ホール計画の関係者の変遷（筆者作成）

### 2.3. 公共ホール計画の課題

これまで述べてきたように、近年求められるようになってきた地域文化拠点としての公共ホールには、地域における価値や役割を發揮するために、公共ホールと地域との関係をより考慮した計画が必要である。また、その際に専門家だけでホールをデザインするのではなく、時には市民参加も求められる。

地方自治体はこうした要請を受け、計画に主体的に関わる必要があると言える。

しかし、現状として、全国的に劇場法に應えるような計画が行えるような状況であるとは言えず、公共ホール計画に課題を抱える地方自治体が多い。

高宮<sup>[22]</sup>は、以下のように述べている。

先行施設の管理運営計画を検討すると、固有名詞や席数等の諸元を入れ替えただけで、他の記述がほぼ同一という計画書や報告書が散見される。1,500 席のホールと 700 席に満たない形状も異なるホールで、その最適な上演演目等が同一であるというのは、相当奇異な話である。また、一部の施設使用については詳細であり一部はほとんど触れられていない、という点まで同一という“コピペ”さえ時に見られる。

そもそも、各地方自治体に公共ホールがほぼ一つで、建築物の耐用年数がおおよそ 50 年であることを考えると、公共ホールの新設や、全体を見直すような大規模改修の

際に、設置主体として関わる地方自治体の職員は常に初めての経験であることが指摘されている<sup>[22]</sup>。さらに、地方自治体の職員の配置替えが約5年に一度行われることから、公共ホールについての知識が浅く全体のイメージがつかめないまま新設事業や大規模改修事業に関わることも考えられる。

そのような中、文化庁による「大学を活用した文化芸術推進事業」など、人材育成を行う取り組みも出てきている。例えば、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科は同事業の委託を受け「公共ホールのつくり方と動かし方を学ぶ」と題し、年に2回の各地の公共ホールでの集中講座と、年間を通じた研究会を開催している。参加者は、「これからの公共ホールに関心を持つ方」として一般募集がされており、実際に地方自治体職員、公共ホールの管理運営団体職員、舞台芸術の実演家、学生などが参加している。

研究会で取り上げられる公共ホール計画の事例は、限られた一部の勘や経験の優れた人々によってなされているものが多い。そうした事例を見ると、公共ホールと地域との関係を考慮し、考慮した結果設定した要求事項を一貫して設計（ハード面、ソフト面含む）に反映している。つまり、公共ホールに対する体系的な理解が自然と醸成されていると言える。

しかし、限られた一部の勘や経験が優れた人々が確保できるとは限らない。経験が蓄積されづらい地方自治体の職員が主体的に取り組み、設計者、施工者、管理運営者、利用者・市民などと協力して地域の文化拠点として公共ホールを計画するためには、公共ホールが体系的に捉えられ、その構造の整理が行われることが望まれる。そうした公共ホールの体系的な理解があれば、先行の事例についても、設計結果（ハード面、ソフト面含む）だけを見るのではなく、その設計結果が地域とのどのような関係によってなされたか、「なんのために」設計されたかという見方をすることができる。

## 2.4. 公共ホール計画の先行研究

しかしながら、それぞれの地域への役割を明確に打ち出した公共ホールをどのように構想するかが体系的になっているとは未だ言えない状況である。

劇場法で初めて公共ホールの役割が定義されたことにより、公共政策、建築、アーツマネジメント等の各分野での研究、関連書籍や記事において、公共ホールと社会の関係性への関心が高まっている。しかし、そこで扱われる話題は、理念的なものか実践報告がほとんどである。理念に関するものは抽象的であり、実践報告はその成功要因を個別具体の事例に見出すことが多いため、いずれにせよ応用が難しい。

公共ホールの計画に関する研究は、既存の公共ホールの実態の調査や分析に関するものや、新設や改修の際の計画の過程や手法に関するものが存在する。既存の公共ホール



の実態の調査、分析に関しては、ホールの持つ客席数、舞台機構、設備等の具体的な部分の実態に関するものが多い。計画の過程や手法に関するものも、客席数、舞台機構、設備等の具体的な部分に対してどのような計画を行うべきかという研究<sup>[23][24]</sup>がほとんどで、計画全体を俯瞰したものは、さほど多くない。

また、その切り口においては、公共ホールの利用者にとっての価値や公共ホールと社会との関係性に力点を置いたものと、設置者や運営者の目線で技術面、コスト面等に力点を置いたものに分けられる。

本研究は、公共ホール計画全体を俯瞰するような立場をとり、その目的としては、公共ホールの利用者や、置かれる地域や社会における役割を考えるものである。このような研究には、高宮<sup>[22]</sup>による、プロジェクトマネジメントの切り口の研究や、全国公立文化施設協会による「公立文化会館運営ハンドブック」<sup>[4]</sup>、書籍では日本建築学会「公共施設の再編 計画と実践の手引き」<sup>[25]</sup>、建築思潮研究所による「建築設計資料集 18 劇場・ホール」<sup>[26]</sup>、谷口汎邦らによる「建築計画・設計シリーズ 12 公共ホール」<sup>[27]</sup>等が存在する。しかし、公共ホールのハード面とソフト面を一体として捉え、体系的にその構造を示した研究や事例はない。したがって、公共ホールを体系的に捉え、その計画を検討したような研究や事例もない。

## 2.5. 本研究の新規性とスコープ

### 2.5.1. 本研究の新規性

本研究は、公共ホールを体系的に捉えた点、体系的な理解にもとづいて公共ホール計画を検討した点に新規性がある。

これにより、地域文化拠点としての公共ホールの構想の際に、一部の勘や経験の優れた人々の捉えるような公共ホールの考え方ができることが期待される。また、ホールの体系的な理解があれば、先行研究や先行事例についても、設計結果（ハード面、ソフト面含む）だけを見るのではなく、その設計結果が地域とのどのような関係によってなされたか、「なんのために」設計されたかという見方をすることができる。

### 2.5.2. 本研究のスコープ

#### 2.5.2.1. 設置主体

本研究では、公共ホールの中でも、政令市以外の市区町村が設置主体であるものを扱う。表 2-2 は地域創造<sup>[6]</sup>の調査における設置主体の分類をもとに筆者が作成したものである。設置主体として「国」「都道府県」「政令市」「(政令市以外の)市区町村」と分類され、それぞれ具体例が示されている。本研究で扱うのは図中で赤色で示された部分で

ある。政令市以外の市区町村が設置主体であるものを扱う理由は、これらの分類の中で、もっとも置かれる地域に近く、地域文化拠点として公共ホールがあることが求められるからである。また、2.3 項で述べたような公共ホール計画の課題を最も抱えているのも市区町村に設置されている公共ホールである。

表 2-2 公共ホールの設置主体別分類（筆者作成）

設置主体	具体例
国	国立劇場、新国立劇場等
都道府県	東京芸術劇場、 KAAT（神奈川芸術劇場）等
政令市	北九州芸術劇場、 さいたま芸術劇場等
(政令市以外の) 市区町村	座・高円寺、いわきアリオス等

### 2.5.2.2. コンセプトのデザイン

本研究では、公共ホール計画のプロセス（図 2-1）のうち、詳細設計や施工については扱わず、「基本構想・基本計画」程度の詳細度の計画を対象とする。そして、この程度の詳細度の計画を指して公共ホールの「コンセプト」と呼び、コンセプトを検討することを公共ホールのコンセプトの「デザイン」と呼ぶ。

「コンセプト」は具体的には、地方自治体が発行する「基本構想」や「基本計画」等のドキュメントで表現される程度の詳細度のデザインを指すが、基本構想や基本計画という言葉は発行されたドキュメントを想起しやすく、また地方自治体ごとに呼称が異なるため、本研究ではそれらの詳細度でなされた計画を「コンセプト」と呼ぶ。

「デザイン」とは、建物の色かたちといった意匠デザインのみを指すものではなく、施設や設備などのハード面と、制度や運営体制などのソフト面の双方を含めた検討を指す。企画から施工までを含めた「計画」や「基本計画」等の言葉と区別するという意味から、また地域の文化拠点となるべくデザイナー（デザインを行う人）の創意工夫が行われるという意味から「デザイン」という言葉を採用する。

公共ホールのコンセプトのデザインが完了した状態とは、建物や設備といったハード面と、制度や運営といったソフト面それぞれにおいて大まかな構成が決定され、その後

に設計者に引き渡すことのできる状態である。

### 2.5.2.3. 地域の文化拠点

劇場法には公共ホールのあるべき姿の指針が記載されているが、具体的に達成すべき数値目標などは示されていない。定量的な目標を定めるよりも、それぞれの地域に合った公共ホールを模索していくようなコンセプトのデザインの仕方が求められているということが言える。しかし、研究対象としての公共ホールを明確にするため、本研究で扱う公共ホールの目指す姿を「地域の文化拠点」と定義した。「地域の文化拠点」という言葉は、劇場法の前文にも見られる言葉である。

本研究における「地域の文化拠点」についてさらに詳しく考察を行い、定義した結果を図 2-4 に示す。まず、「地域の文化拠点」の「地域の」の部分について、「地域の要求に応える」と定義し、「文化拠点」の部分について、劇場法の記述から、「文化芸術を継承し、創造し、発信する場」と定義し、これら二つを満たすものを「地域の文化拠点」とした。さらに、そうした公共ホールをデザインするために重要な点について、「地域の要求に応える」に対しては「地域の要求を捉える」と、「地域の要求を反映する」とし、それらの一貫性を保つこととした。また、「文化創造を継承し、創造し、発信する場」に対しては、「文化創造を継承し、創造し、発信する機能を盛り込む」とし、「地域の要求を反映する」との一貫性を保つこととした。

本研究では、これらの定義を前提として次章以降で示す設計や評価を行った。

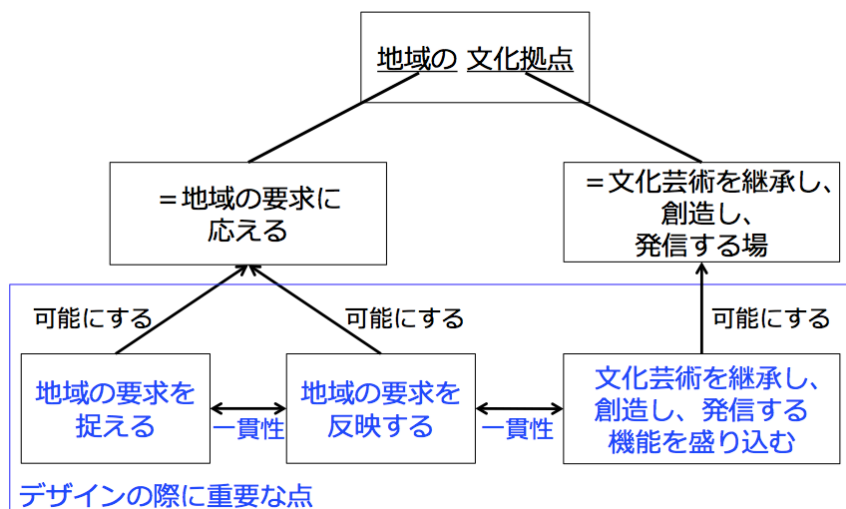


図 2-4 地域の文化拠点としての公共ホールの分析 (筆者作成)

### 3. 公共ホールとコンセプトデザインチームの構造分析

本章では、公共ホールを体系的に捉えるために行った公共ホールとコンセプトデザインチームの構造分析について示す。まず、システムズエンジニアリングとシステムアーキテクチャの概念について説明する。次に、対象とするシステムとして、デザインされる公共ホールとデザインする主体であるコンセプトデザインチームを設定したことを述べる。そして、公共ホールの構造分析の過程と結果を示した後で、コンセプトデザインチームの構造分析の過程と結果を示す。

#### 3.1. システムズエンジニアリングとシステムアーキテクチャ

本節では、公共ホールデザインのシステムアーキテクチャを設計する意義を説明する。

第2章で述べた研究の背景や、4.2節に示す要求分析の結果から、公共ホールデザインの全体像が把握でき、そのデザインにおいては地域の要求を捉え、一貫性を保ってデザインに反映していることが示せるようなフレームワークの設計を行う必要があると言える。

本研究では、これらの要求を満たしたフレームワークの設計を行うため、システムズエンジニアリングの考え方を適用し、公共ホールデザインのシステムアーキテクチャ設計を行い、その結果からフレームワークを整理した。

システムズエンジニアリングにおけるシステムアーキテクチャとは、「構成要素の設計や進化を左右するような、構成要素の構造、構成要素間の関係、そして原理や指針」である<sup>[28]</sup>。公共ホールデザインをシステムとして捉え、システムズエンジニアリングを適用してシステムアーキテクチャを記述することは、公共ホールデザインの構成要素を明らかにし、その構成要素の構造と、構成要素間の関係を示すことであると言える。また、その記述した個々の公共ホールのシステムアーキテクチャは、原理や指針として、新たな公共ホールデザインにも応用できるはずである。なお、本研究における「システム」とは、情報システムを指す狭義のものではなく、「仕組み」を意味するものである。

本研究では、公共ホールデザインの構成要素の構造、構成要素間の関係、原理や指針を明らかにした。この一連の流れをシステムアーキテクチャ設計という。そして、システムアーキテクチャ設計結果をもとにそれぞれのフレームワーク、ガイドを設計した。

### 3.2. 対象とするシステムの特定

まず、System of Interest の設定について説明する。System of Interest は、先行研究や公共ホールデザインに関する書籍を元に行った。

システムズエンジニアリングにおいて、対象とするシステムを System of Interest と呼ぶ。公共ホールのコンセプトデザインへのシステムズエンジニアリングの適用にあたり、はじめにその適用の対象を System of Interest として設定した。

まず、「公共ホールデザイン」を構成している要素を図 3-1 のように明らかにした。

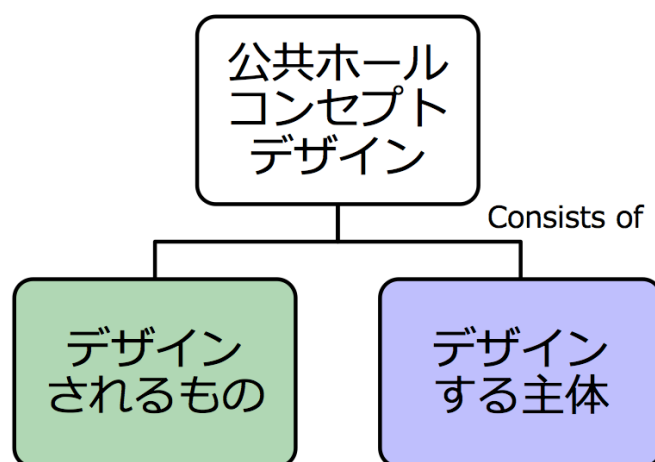


図 3-1 「公共ホールのコンセプトデザイン」の構成要素（筆者作成）

公共ホールのコンセプトデザインは「デザインされるもの」と「デザインする主体」に分けられる。デザインされるものは公共ホールのコンセプトである。

デザインする主体とは、公共ホールのデザイナー、デザインチームである。個人の場合も複数人数の場合も考えられるが、本論文ではまとめて「コンセプトデザインチーム」とする。そのため、本研究においてシステムアーキテクチャ設計を行うべき対象である System of Interest を、「公共ホール」自体と、公共ホールの「コンセプトデザインチーム」と設定した。

つまり、公共ホールデザインのシステムアーキテクチャ設計とは、デザインする「公共ホール」と「コンセプトデザインチーム」についてシステムの構成要素を明らかにし、その構成要素間の関係を記述することである。

### 3.3. 公共ホールの構造分析

### 3.3.1. 公共ホールの目的の設定

本研究における公共ホールの目的は、「地域の文化拠点として機能すること」である。

### 3.3.2. 公共ホールのライフサイクルの設定

最終成果物である「公共ホール」について、ライフサイクルの設定を行った。ライフサイクルの設定を行うにあたって、ISO/IEC15288 における典型的なシステムライフサイクルステージ<sup>[29][30]</sup>と、一般的な公共ホールの計画プロセスを参考にした。

公共ホールの計画から開館までの一般的なプロセスは 2.1.2.2 で図 2-1 に示したとおりである。

図 3-2 は、ISO/IEC15288 における典型的なシステムライフサイクルステージである。これらをもとに、公共ホールのライフサイクルを図 3-3 のように定義し、「基本構想・基本計画ステージ」、「基本設計/制度・運営体制設計ステージ」、「施工/制度・運営体制づくりステージ」、「利用・サポートステージ」「閉館・建て替えステージ」とした。

Concept stage	Development stage	Production stage	Utilization stage	Retirement stage
			Support stage	

図 3-2 典型的なシステムライフサイクルステージ (ISO/IEC/IEE 15288:2015 より筆者作成)

基本構想・基本計画	基本設計	施工	利用・サポート	閉館 ・ 建て替え
	制度・運営体制設計	制度・運営体制づくり		

図 3-3 公共ホールのライフサイクル

### 3.3.3. 公共ホールのステイクホルダーの設定

公共ホールのステイクホルダーの設定を行った。まず、公共ホールの主なステイクホルダーについて、先行研究や書籍から特定し、3.3 節で定義したライフサイクルごとに関わりの深さを検討した。図 3-4 はその結果を示したものである。

ライフサイクルごとのステイクホルダーの関わりの深さはの三種類に分類し、「○：多くの事例において関わりが深い」「△：事例によっては関わりが深い」「無印：多くの事例で関わりが浅い」とした。

3.2 で設定した通り、本研究においてシステムズエンジニアリングを適用する対象である System of Interest は、「公共ホール」と「コンセプトデザインチーム」である。

システムアーキテクチャ分析を行うにあたり特に重要視する公共ホールのライフサイクルは、「公共ホール」については「利用・サポートステージ」であり、「公共ホールデザインチーム」については、その活動の範囲である「基本構想ステージ」であると特定した。

以上から、「公共ホール」についての特に重要なステイクホルダーは緑色の枠で示した部分であり、「公共ホールデザインチーム」についての特に重要なステイクホルダーは青色の枠で示した部分であると設定した。

ライフ サイクル	基本構想 ・ 基本計画	基本設計	施工	利用・サポート	閉館 ・ 建て替え
		制度・運営体制 設計	制度・運営体制 づくり		
地方行政	○	○	○	○	○
アドバイザー	○	○	○		
利用者	市民 ・ 市民団体	○	△	○	○
	その他 利用者	○	△	○	○
設計者	△	○	△		
施工者		△	○		
運営者			○	○	○
(芸術監督)			○	○	○

**コンセプトデザインチームの  
重要なステージ**
**公共ホールの  
重要なステージ**

図 3-4 公共ホールのライフサイクルと主なステイクホルダー

### 3.3.4. コンテキストからの構造分析

#### 3.3.4.1. コンテキスト分析

コンテキスト分析は、3.3.3 項で本研究における公共ホールの重要なライフサイクルステージと特定した「利用・サポートステージ」において行った。

まず、公共ホールの「利用・サポートステージ」におけるコンテキストを、図 3-15 のように特定した。

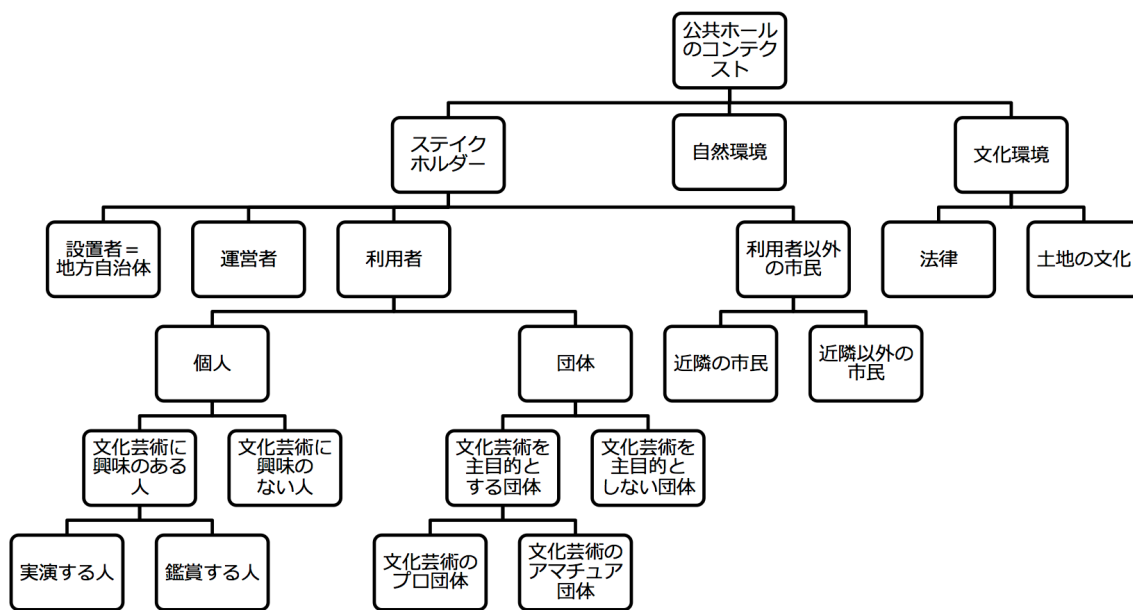


図 3-5 公共ホールのコンテキスト（利用・サポートステージ）

公共ホールのコンテキストは、「人（ステイクホルダー）」と「自然環境」、「文化環境」に大別できる。

地域文化拠点としての公共ホールを対象とするという研究のスコープより、図 3-5 のうち特に重要なコンテキストは、ステイクホルダーである。これについてさらに細かく分類を行った。

また、文化環境は、「法律」と「土地の文化」に分けられる。

結果として、「利用・サポートステージ」における公共ホールのコンテキストの小項目を「設置者＝地方自治体」「運営者」「文化芸術に興味があり、実演する個人の利用者」「文化芸術に興味があり、鑑賞する個人の利用者」「文化芸術に興味のない個人の利用者」「文化芸術のプロの利用団体」「文化芸術のアマチュアの利用団体」「舞台芸術を主目的としない利用団体」「利用者以外の近隣の市民」「利用者以外の近隣にいない市民」「自然環境」「法律」「土地の文化」の 13 項目と特定した。

### 3.3.4.2. 要求機能の洗い出し

次に、特定したコンテキストの小項目ごとに、要求機能の洗い出しを行った。表 3-1 はその結果である。それぞれの要求機能には、ホール（Hall）への要求（Requirement）として、「HR」から始まる番号を振った。



表 3-1 公共ホールの要求機能

コンテキスト		No.	機能
自然環境		HR1	自然環境と融和する機能
文化環境			
	法律	HR2	法律に従う（制約）
	土地の文化	HR3	土地の文化と融和する機能
ステイクホルダー			
	設置者 = 地方自治体	HR4	地方自治体の方針に従う（制約）
	運営者	HR5	建物（ハード）の維持管理がされる
		HR6	建物（ハード）が見直される
		HR7	運営（ソフト）が見直される
利用者			
	個人		
	文化芸術に興味のある人		
	実演する人	HR8	文化芸術を創造させる機能
		HR9	文化芸術を練習させる機能
		HR10	文化芸術を発表させる機能
		HR11	足を運ばせる機能
	鑑賞する人	HR12	文化芸術の情報を発信する機能
		HR13	文化芸術を鑑賞させる機能
		HR14	足を運ばせる機能
	文化芸術に興味のない人	HR15	交流させる機能
		HR16	足を運ばせる機能
	団体		
	文化芸術を主目的とする団体		
	文化芸術のプロ団体	HR17	誘致する機能
		HR18	文化芸術を創造させる機能
		HR19	文化芸術を練習させる機能
		HR20	文化芸術を発表させる機能
		HR21	足を運ばせる機能
	文化芸術のアマチュア団体	HR22	文化芸術を創造させる機能
		HR23	文化芸術を練習させる機能
		HR24	文化芸術を発表させる機能
		HR25	足を運ばせる機能
	文化芸術を主目的としない団体	HR26	文化芸術の情報を発信する機能
		HR27	文化芸術を鑑賞させる機能
		HR28	足を運ばせる機能
利用者以外の市民			
	近隣の市民	HR29	公共ホールへの理解を得る機能
		HR30	公共ホールに興味を持たせる機能
	近隣以外の市民	HR31	公共ホールへの理解を得る機能
		HR32	公共ホールに興味を持たせる機能

### 3.3.4.3. 機能設計

洗い出した要求機能を元に、公共ホールの機能の細分化を行った。表 3-2 は、公共ホールの機能を構造的な表現で表したものである。

表 3-2 公共ホールの機能の構造的な表現

No.	機能	導出元
HF1	自然環境と融和する機能	HR1
HF2	土地の文化と融和する機能	HR3
HF3	建物（ハード）の維持管理をする機能	HR5
HF4	見直しをする機能	-
HF4.1	建物（ハード）を見直す機能	HR6
HF4.2	運営（ソフト）を見直す機能	HR7
HF5	文化芸術を創造させる機能	-
HF5.1	文化芸術に興味があり、実演する個人の利用者に文化芸術を創造させる機能	HR8
HF5.2	舞台芸術のプロの利用団体に文化芸術を創造させる機能	HR18
HF5.3	舞台芸術のアマチュアの利用団体に文化芸術を創造させる機能	HR22
HF6	文化芸術を練習させる機能	-
HF6.1	文化芸術に興味があり、実演する個人の利用者に文化芸術を練習させる機能	HR9
HF6.2	舞台芸術のプロの利用団体に文化芸術を練習させる機能	HR19
HF6.3	舞台芸術のアマチュアの利用団体に文化芸術を練習させる機能	HR23
HF7	文化芸術を発表させる機能	-
HF7.1	文化芸術に興味があり、実演する個人の利用者に文化芸術を発表させる機能	HR10
HF7.2	舞台芸術のプロの利用団体に文化芸術を発表させる機能	HR20
HF8	足を運ばせる機能	-
HF8.1	文化芸術に興味があり、実演する個人の利用者に足を運ばせる機能	HR11
HF8.2	文化芸術に興味があり、鑑賞する個人の利用者に足を運ばせる機能	HR14
HF8.3	文化芸術に興味のない個人の利用者に足を運ばせる機能	HR16
HF8.4	舞台芸術のプロの利用団体に足を運ばせる機能	HR21
HF8.5	舞台芸術のアマチュアの利用団体に足を運ばせる機能	HR25
HF8.6	文化芸術を主目的としない団体に足を運ばせる機能	HR28
HF9	文化芸術の情報を発信する機能	-
HF9.1	文化芸術に興味があり、鑑賞する個人の利用者に文化芸術の情報を発信する機能	HR12
HF9.2	文化芸術を主目的としない団体に文化芸術の情報を発信する機能	HR26
HF10	文化芸術を鑑賞させる機能	-
HF10.1	文化芸術に興味があり、鑑賞する個人の利用者に文化芸術を鑑賞させる機能	HR13
HF10.2	文化芸術を主目的としない団体に文化芸術を鑑賞させる機能	HR27
HF11	文化芸術に興味のない個人の利用者に交流させる機能	HR15
HF12	舞台芸術のプロの利用団体を誘致する機能	HR17
HF13	公共ホールへの理解を得る機能	-
HF13.1	利用者以外の近隣の市民からの公共ホールへの理解を得る機能	HR29
HF13.2	利用者以外の近隣にいない市民からの公共ホールへの理解を得る機能	HR31
HF14	公共ホールに興味を持たせる機能	-
HF14.1	利用者以外の近隣の市民に公共ホールに興味を持たせる機能	HR30
HF14.2	利用者以外の近隣にいない市民に公共ホールに興味を持たせる機能	HR32

さらに、要求から制約条件を表 3-3 のように整理した。それぞれの制約条件には、ホール（Hall）への制約として、「H 制」から始まる番号を振った。機能設計、制約条件の整理の結果、図 4-9、図 4-10 のようにフレームワークの機能の視点の部分、制約の部分についての設計がなされた。

表 3-3 公共ホールの制約条件

No.	制約条件	導出元
H制1	法律に従う	HR2
H制2	地方自治体に従う	HR3
H制3	自治体の方針に従う	HR3
H制4	自治体の予算に従う	HR3
H制5	自治体の条例に従う	HR3

#### 3.3.4.4. 物理設計

公共ホールの物理設計を行った。図 3-6 は、設計した公共ホールの物理を構造的な表現で表したものである。

公共ホールの物理は、「ハード」と「ソフト」に大別できる。

「ハード」はさらに「建物内」と「建物外」に分けられ、「建物内」は「特定の用途のための専用施設」と「特定の用途によらない共用施設」に分けられる。「特定の用途のための専用施設」は「利用者のための施設」と「維持管理に関する施設」に分けられる。地域文化拠点としての公共ホールを対象とするという研究のスコップより、「利用者のための施設」をさらに「文化芸術に関する施設」と、「文化芸術以外を主目的とした施設」に分けた。公共ホールはホール施設であるという前提より、「文化芸術に関する施設」は「ホール」と「その他文化芸術に関する施設」に分けた。

「ソフト」（制度・運営体制）はさらに「文化芸術に関する制度・運営体制」と、「維持管理に関する制度・運営体制」に分けられる。「文化芸術に関する制度・運営体制」は「自主事業」、「貸館事業」、「その他事業」に分けた。

表 3-4 は、図 3-6 を表形式で表したものである。それぞれの物理構成要素には、ホール（Hall）の物理的な（Physical）要素として、「HP」から始まる番号を振った。

物理設計の結果は、フレームワークとしての抽象度を検討した結果、視点を記述する上では「ハード（施設）」と「ソフト（制度・運営体制）」のレベルで記述するという形をとった。

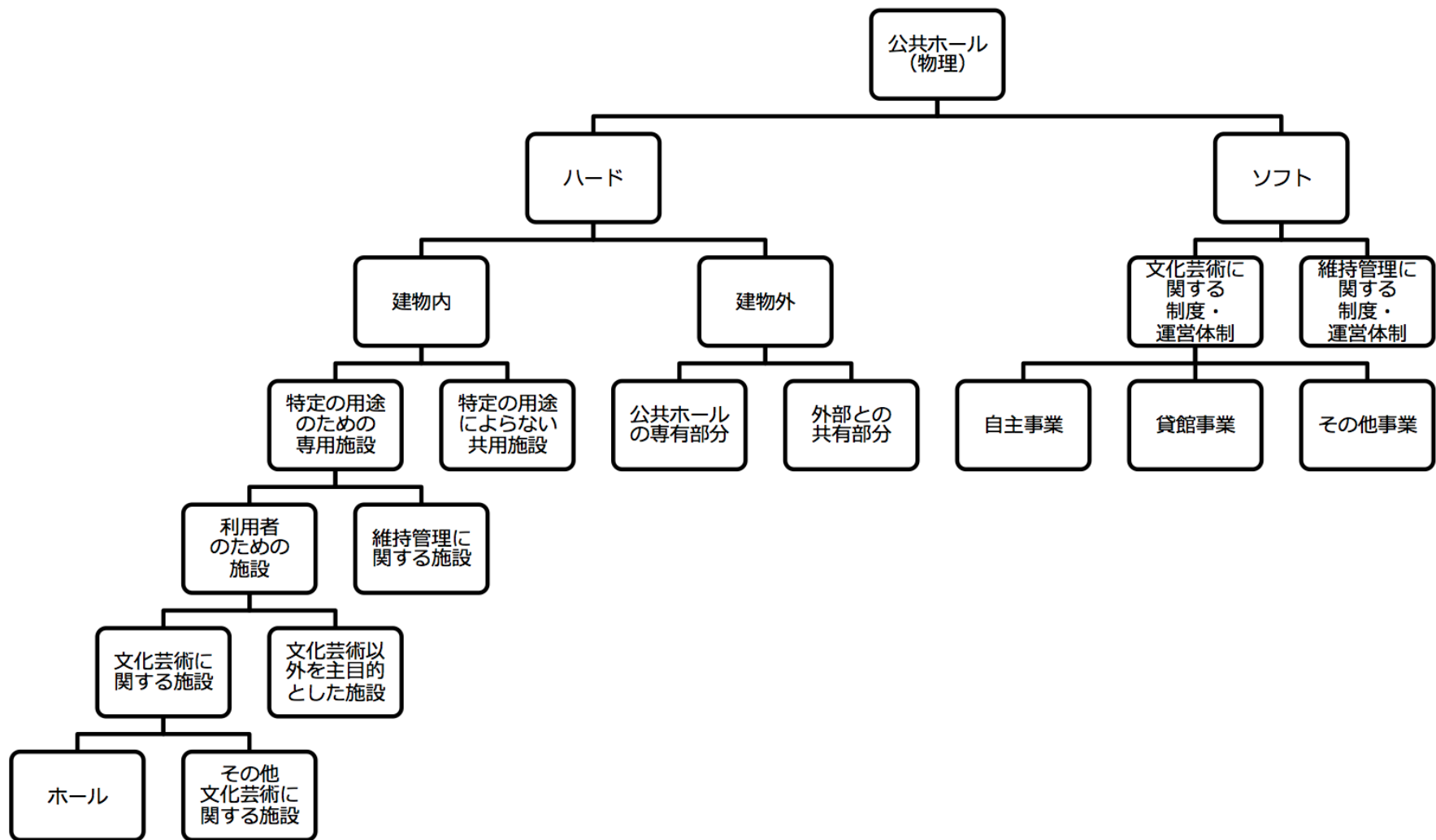


図 3-6 公共ホールの物理の構造的な表現

表 3-4 公共ホールの物理の構造的な表現

No.		物理
HP1		ハード
	HP1.1	建物内
	HP1.1.1	特定の用途のための専用施設
	HP1.1.1.1	文化芸術に関する施設
	HP1.1.1.1.1	ホール
	HP1.1.1.1.2	その他文化芸術に関する施設
	HP1.1.1.2	文化芸術以外を主目的とした施設
	HP1.1.2	維持管理に関する施設
	HP1.2	建物外
	HP1.2.1	公共ホールの専有部分
	HP1.2.2	外部との共有部分
HP2		ソフト
	HP2.1	文化芸術に関する制度・運営体制
	HP2.1.1	自主事業
	HP2.1.2	貸館事業
	HP2.1.3	その他事業
	HP2.2	維持管理に関する制度・運営体制

### 3.4. コンセプトデザインチームの構造分析

#### 3.4.1. コンセプトデザインチームの目的の設定

コンセプトデザインチームの目的は、地域文化拠点としての公共ホールのコンセプトをデザインすることであると設定した。

#### 3.4.2. 事例概要

構造分析の事例として取り上げたいわき芸術文化交流館(いわきアリオス)について、その基本情報やデザインの時点の状況を説明する。

いわきアリオスは、2009年にグランドオープンした、福島県いわき市が設置主体である公共ホールである。いわき駅から徒歩15分に位置し、敷地面積約11,228㎡の比較的大きなホールとなっている。

対象として選出した理由は、「地域文化拠点」を指向したホールであることと、その

うちでも、計画に関するデータが多く現存している例の一つであるためである。

いわきアリオスは、以下のような基本コンセプト<sup>[31]</sup>を掲げている。

1. 気軽に集い、ふれあい、楽しめるコミュニティであること。  
敷居の高い「文化の殿堂」ではなく、子どもから大人まで、多くの市民が自分らしい楽しみ方、自分の居場所が見つけれられる、新たな『コミュニティ空間』とします。
2. 自分を磨き、新たな価値を生み出す創造的活動拠点であること。  
市民が日々の文化活動を通じて自らの感性や知性を磨き、芸術家や価値観の異なる人々との出会いが輪となって新たな価値を生み出す『生産と創造の場』とします。
3. みずみずしい芸術文化に触れ、地域への誇りをともに育む場であること。  
地域の伝統文化から先駆的な舞台芸術まで、創造性と生命力にあふれる芸術文化にふれることで、地域に暮らす豊かさを実感できる『感動と共感の舞台』とします。
4. まちとつながり、まちを感じる賑わいの空間であること。  
人とまち、人と文化をつなぐ「文化交流ゾーン」の結節点として、芸術の力を通じながら、市街地の刺激と活気、潤いや安らぎが享受できる『まちの広場』とします。
5. 地域における公共劇場の新しいスタンダードであること。  
良質な響きへのこだわり、優れた舞台設備、臨場感あふれる客席空間、サロンとしての雰囲気づくりなど、お客様の満足度を追求した『居心地の良い劇場』とします。

また、2009年からの5年間、いわきアリオスはニッセイ基礎研究所に依頼して事業運営評価調査を行っている。これにより、オープン後の評価もされている。評価報告は、運営データの分析、観客等へのアンケート調査、市民へのインタビュー、経済波及効果の分析、新聞雑誌等への掲載のパブリシティ効果測定からなっており、2009年のオープン当初の調査結果<sup>[32]</sup>を見ると、事業や運営面での改善すべき課題や、入場者のターゲット別の戦略といった点に触れられているものの、数値としても、開館初年度にもかかわらず、施設稼働率は全国平均を上回っているというけっかとなっている。また、定性的評価としても、観客、参加者の事業や運営、施設に対する満足度も高くなっている。

これらの資料、データから、いわきアリオスいわきアリオスは本研究で対象とする「地

域文化拠点」として指向された公共ホールであり、また本研究では対象外としている実際の運営についても、高い水準で実行している例と言える。

設計した「公共ホールのコンセプトデザインのフレームワーク」の視点で、このいわきアリオスの例についてシステムアーキテクチャ設計を行った。アーキテクチャ設計を行うに際し、以下の資料と、アリオス職員との面会により聞き取りを主とした調査で得られた結果を参考とした。

表 3-5 コンセプトデザインチームの構造分析に用いた資料一覧

資料番号	資料名	発行元
資料①	公共ホールのつくり方と動かし方を学ぶ 冬季集中ワークショップ 資料 (2015) <sup>[33]</sup>	立教大学社会デザイン研究所
資料②	いわき市文化交流施設整備等事業実施方針 (2003) <sup>[34]</sup>	いわき市
資料③	いわき市公告 141 号 特定事業 (いわき市文化交流施設整備等事業) の選定について (2004) <sup>[35]</sup>	いわき市
資料④	いわき市文化交流施設整備等事業募集要項 (2004) <sup>[36]</sup>	いわき市
資料⑤	いわき市文化交流施設業務要求水準書 (2004) <sup>[37]</sup>	いわき市
資料⑥	いわき市文化交流施設整備等事業事業者選定基準書 (2004) <sup>[38]</sup>	いわき市
資料⑦	公共ホールのつくり方と動かし方を学ぶ CASE STUDY <sup>[39]</sup>	立教大学社会デザイン研究所

### 3.4.3. 事例からの構造分析

#### 3.4.3.1. 機能設計

いわきアリオスの事例を分析するため、資料とアリオス職員との面会を参考に、機能設計を行った。特に、資料⑦より、実際にコンセプトデザインチームとして、いわきアリオスに携わった人々の対談を基に、どのような人がどのような役割をになってデザインチームとして活動していたかを分析した。なお、この機能設計については、物理設計と行きつ戻りつしながら行われた。

図 3-7 と図 3-8 は、機能設計の結果である。図 3-7 はコンセプトデザインチームの機能を構造的に表したものである。図 3-8 は機能を動的に表したものである。

### 3.4.3.2. 物理設計

同様に、機能設計と行きつ戻りつしながら、物理設計を行った。

図 3-9 と図 3-10 と図 3-11 は、物理設計の結果である。図 3-9 は、コンセプトデザインチームの物理を構造的に表したものである。図 3-10 は、物理に機能の動的な表現を割り付けたものである。図 3-11 は、さらに、それぞれの流れにおいてやりとりされるものを表したものである。



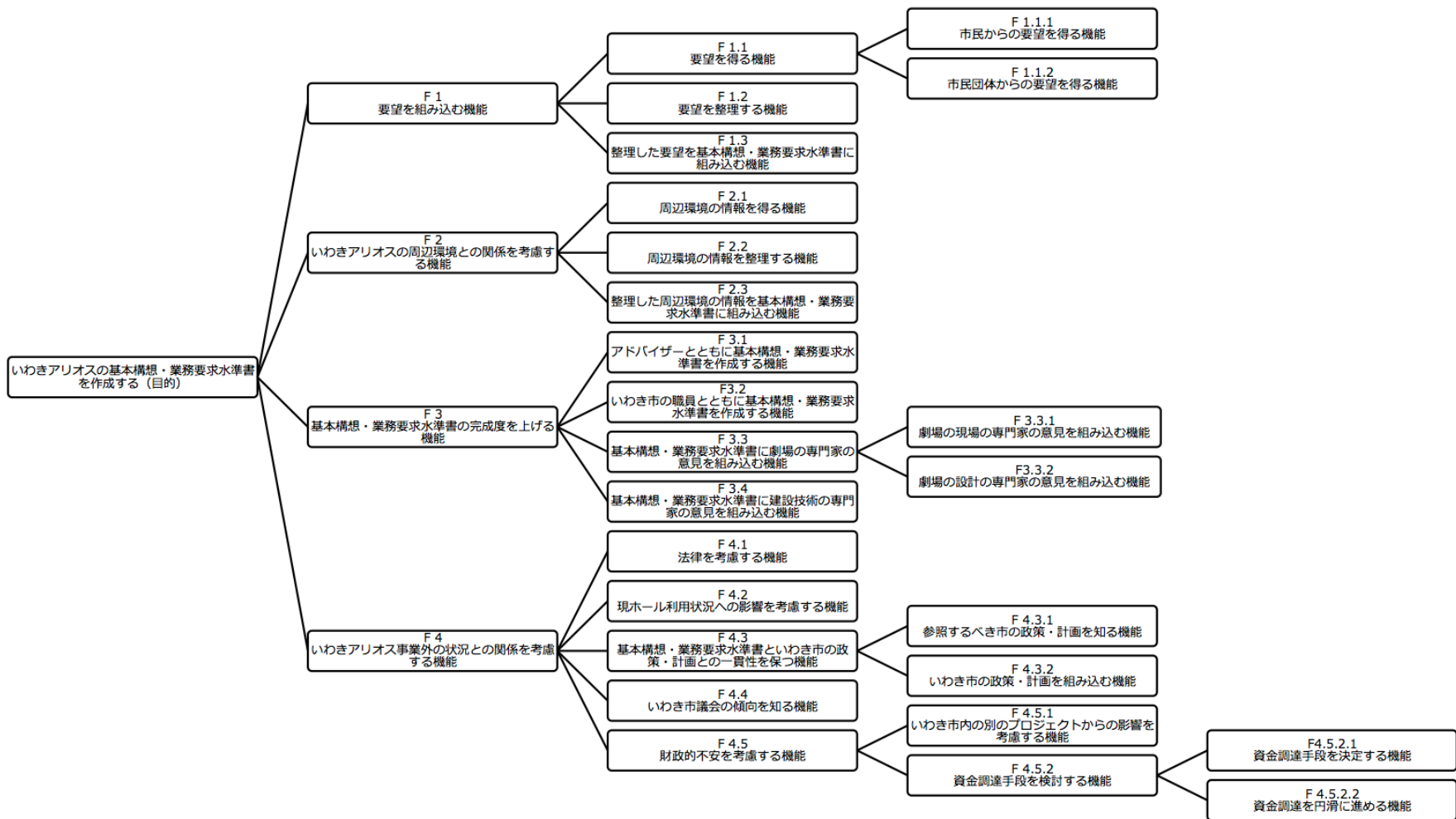


図 3-7 コンセプトデザインチームの機能の構造的な表現

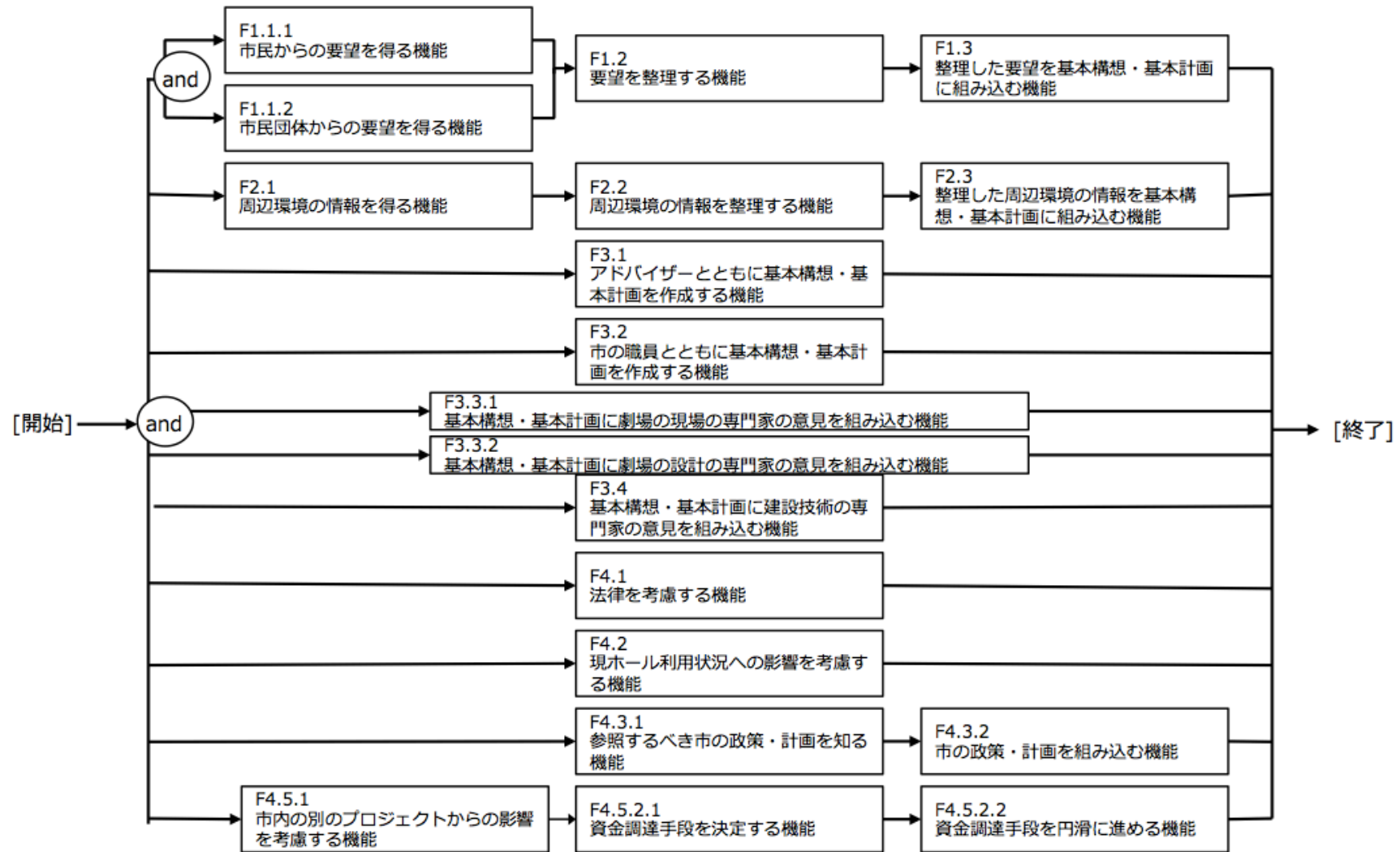


図 3-8 コンセプトデザインチームの機能の動的な表現

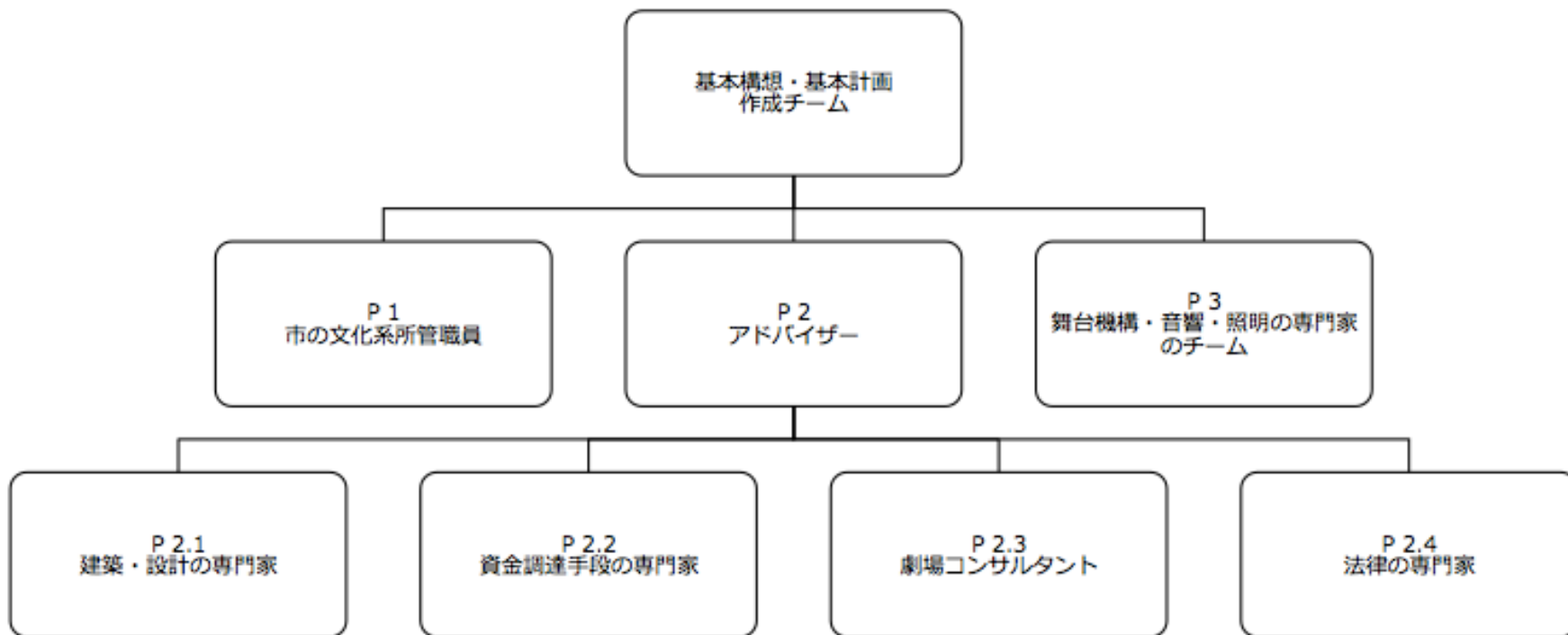


図 3-9 コンセプトデザインチームの物理的構造的な表現

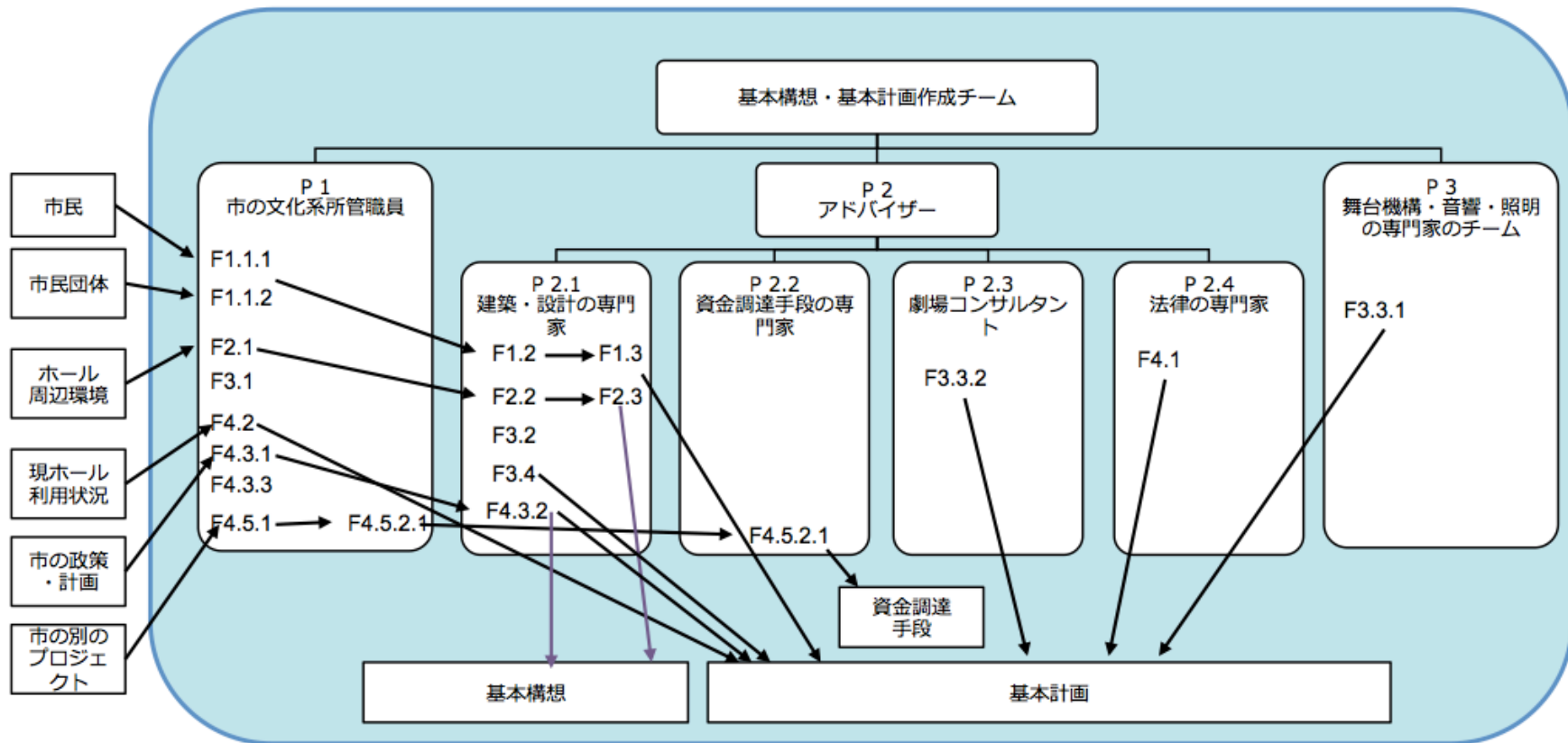


図 3-10 コンセプトデザインチームの物理の動的な表現

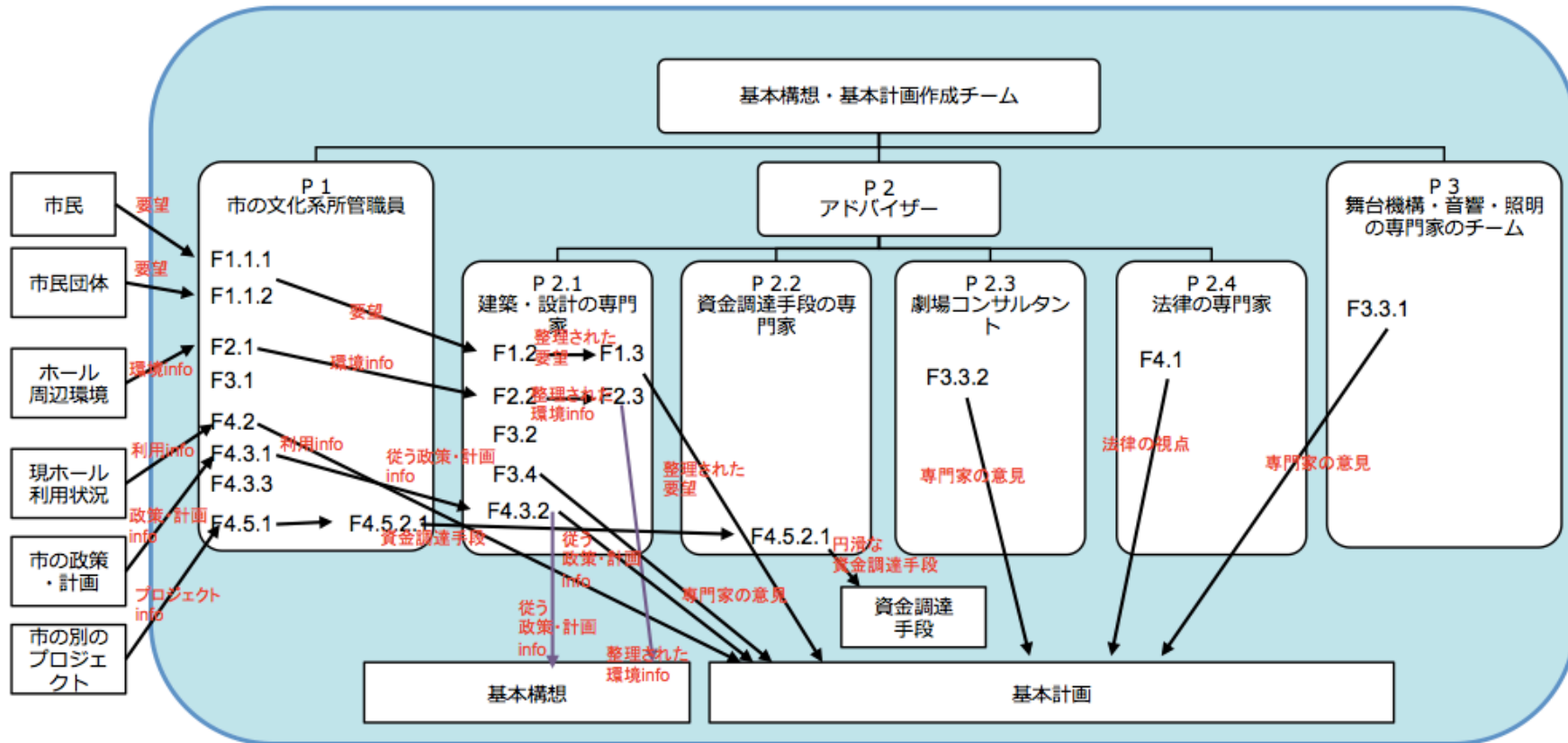


図 3-11 コンセプトデザインチームの機能の動的な表現とやり取りされる要素

## 4. フレームワークの設計

本章では、フレームワークの設計結果とその導出過程について説明する。設計にあたり、第3章で明らかにした公共ホール、公共ホールデザインチームの構造を適切な抽象度で記述した。

### 4.1. 設計結果

#### 4.1.1. フレームワーク概要

本研究では、公共ホールのデザインを、デザインを行うチームと、デザインされる公共ホール自体の二つに分けて考えた。本研究では公共ホールのコンセプトレベルのデザインを対象としているため、デザインを行うチームを特にコンセプトデザインチームとした。

個人の勘や経験の程度によらずコンセプトデザインチームの全体を把握するための観点をまとめたものを「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」と名付けた。

また、個人の勘や経験の程度によらず地域文化拠点としての公共ホールの全体が把握できる観点をまとめたものを、本研究における「公共ホールを考えるフレームワーク」と名付けた。

図 4-1 はこれらの関係性を図示したものである。

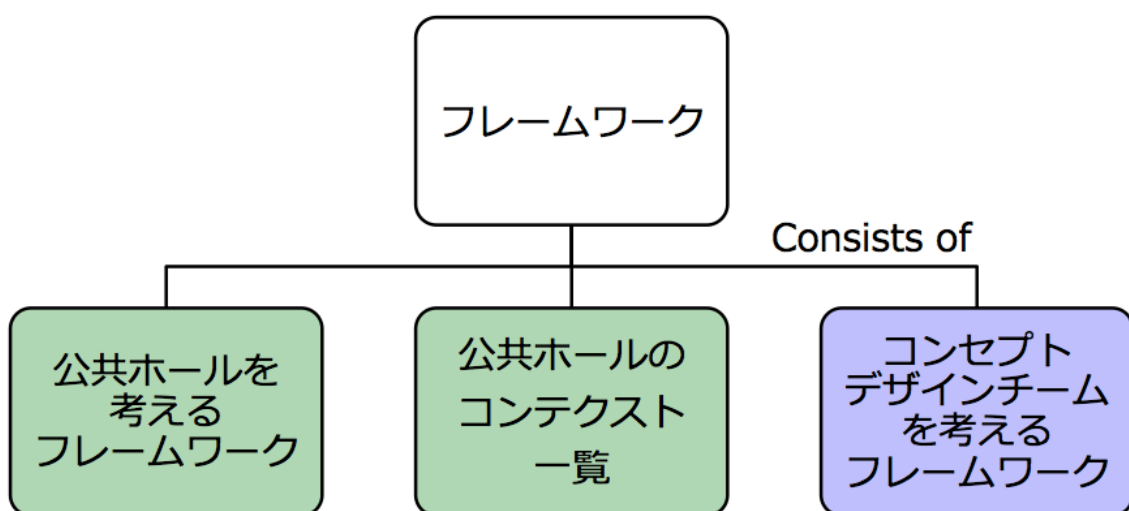


図 4-1 フレームワークの全体像

本研究で設計した公共ホールのコンセプトデザインのフレームワークは、「コンセプト

トデザインチームを考えるフレームワーク」と「公共ホールを考えるフレームワーク」から構成されている。それぞれのユーザーは、「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」については地方自治体の担当者やコンセプトデザインチーム自身、「公共ホールを考えるフレームワーク」については地方自治体の担当者やコンセプトデザインチームを想定している。

次項 4.1.3 項と 4.1.2 項において、それぞれのフレームワークの内容を説明し、4.2 項以降に、それぞれの導出の過程を説明する。

#### 4.1.2. 公共ホールを考えるフレームワーク

図 4-2 に示すのは、「公共ホールを考えるフレームワーク」である。これは、新たな公共ホールのコンセプトデザインや、デザインの現状の整理や、これまでの公共ホールのデザインの事例分析を行うためのものである。ユーザーとしては地方自治体の担当者やコンセプトデザインチームを想定している。

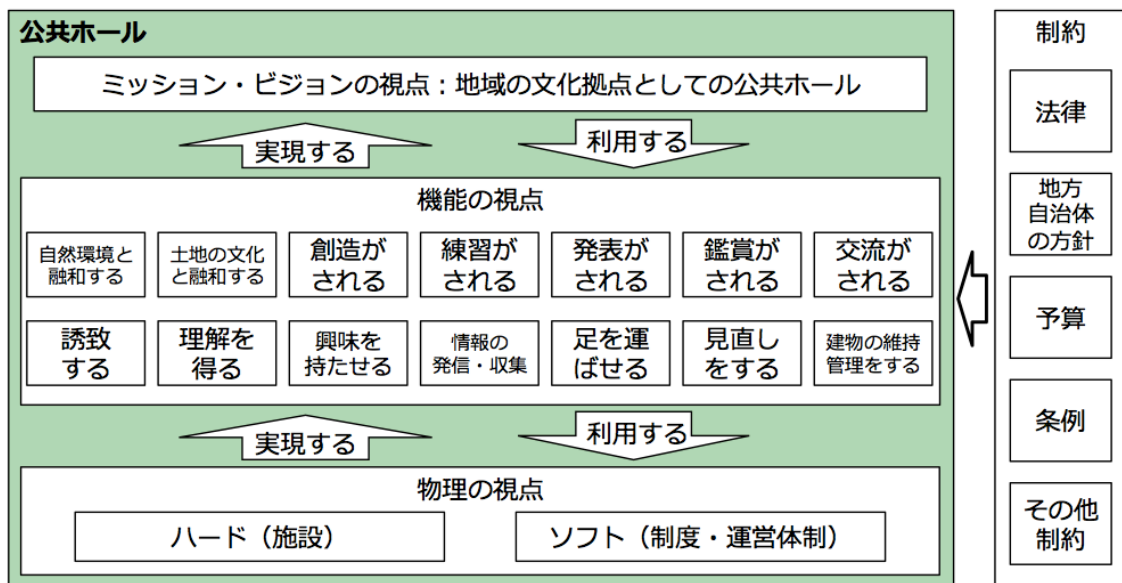


図 4-2 公共ホールを考えるフレームワーク

イネーブラーフレームワーク<sup>[40]</sup>の考え方を採用し、ミッション・ビジョンを実現するために機能の構成要素があり、機能の構成要素を実現するために物理の構成要素があるという全体像から構成されている。加えて、これら全体に対して考慮すべき制約があることを示した。

機能の視点には、地域文化拠点としての公共ホールが持つべき主な機能を挙げた。

これらは、より詳細な機能を考えていくための考え方の起点とするものである。そして、機能を実現するための物理として、「ハード（施設）」と「ソフト（制度・運営体制）」を設定した。これらの導出の根拠は、次節以降に述べる。

このフレームワークにより、公共ホールのコンセプトデザインにおいて、ミッション・ビジョンから機能のデザイン、物理のデザインまで、一貫性のあるデザインが行われやすくなることが期待される。また、「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」の場合と同様、これまでの公共ホールの事例を参考にする際も、どのような機能を、どのような物理で実現していたかを考えることで、参考にできる部分とできない部分が考えやすくなることが期待される。

### 4.1.3. 公共ホールのコンテクスト一覧

図 4-3 は、公共ホールのコンテクスト一覧（再掲）である。

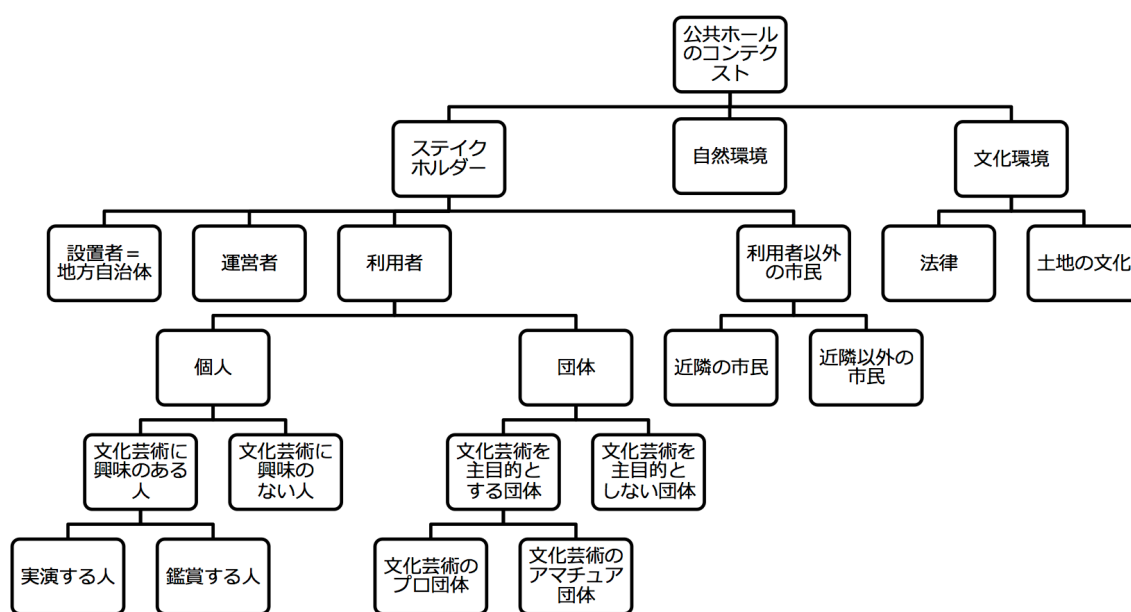


図 4-3 公共ホールのコンテクスト一覧（再掲）

### 4.1.4. コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク

図 4-4 に示すのは、「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」である。これは、新たなコンセプトデザインチームの組織や、デザインチームの現状の整理や、これまでのコンセプトデザインチームの事例分析を行うためのものである。ユーザーとしては地方自治体の担当者やコンセプトデザインチーム自身を想定している。



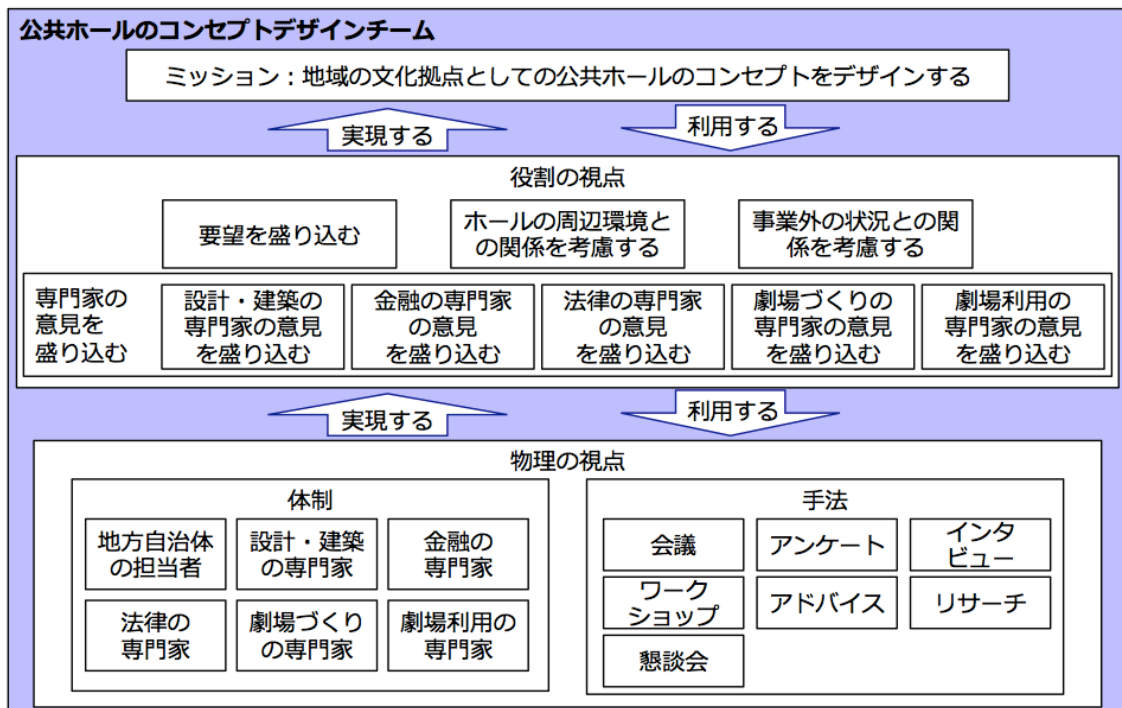


図 4-4 コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク

全体の構造として、ミッションの視点、機能の視点、物理の視点を設定し、イネーブラーフレームワークの考え方によりそれぞれを関係づけた。すなわち、ミッションを機能の構成要素が実現し、機能の構成要素を物理の構成要素が実現しており、逆に、物理の構成要素は機能の構成要素によって利用され、機能の構成要素はミッションによって利用されているという構造となっている。

例えば、コンセプトデザインチームは、「地域文化拠点としての公共ホールのコンセプトをデザインする」というミッションを持っている。そしてそのミッションを実現するために、「要望を盛り込む」「ホールの周辺環境との関係を考慮する」などの機能がコンセプトデザインチームに必要となる。さらに、その機能を実現するための物理的な要素として、「地方自治体の担当者」「設計・建築の専門家」などの体制と、「会議」「アンケート」などの手法の両方が必要となることを示している。

このフレームワークにより、コンセプトデザインチームの活動のために必要な機能と、必要な体制・手法の全体が把握でき、コンセプトデザインチームの組織を行うことや、見直しを行うことが容易になることが期待される。また、これまでの公共ホールデザインの事例を参考にすることも、どのような機能を、誰がどうやって実現していたかを考えることで、参考にできる部分とできない部分が考えやすくなることを期待される。

## 4.2. フレームワークの要求分析

公共ホールのコンセプトデザインのフレームワークのユースケースを分析するにあたり、はじめにフレームワークのユーザーを定義した。図 4-5 のように MECE（抜け漏れがなく、重なりのない状態）に整理を行い、本研究の主なユーザーとして、以下の二種類の属性を設定した。

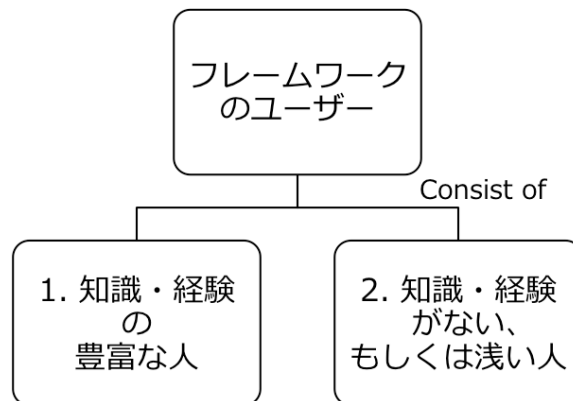


図 4-5 フレームワークのユーザーの定義

1. 公共ホールデザインの知識や経験の豊富な人（アドバイザー、設計・建築の専門家等）
2. 公共ホールデザインの知識や経験がない、もしくは浅い人（地方自治体の担当者、市民等）

本研究は、公共ホールのデザインに関わる人が、地域文化拠点としての公共ホールをどのように考えたらよいかの指針を示すことを目的としている。研究の背景と、この研究の目的を踏まえて、以上に定義したユーザーを想定して、ユースケース分析を行った。図 4-6 は公共ホールのコンセプトデザインのフレームワークのユースケース図である。

結果として、「ユーザーに地域文化拠点としての公共ホールのデザインを行うための活動の全体を把握させる」、「公共ホールデザインの全体を網羅する」、「現状と合致している」、「ユーザーに理解される」、「ユーザーに地域文化拠点としての公共ホールのデザインに利用される」というフレームワークへの要求が導出された。

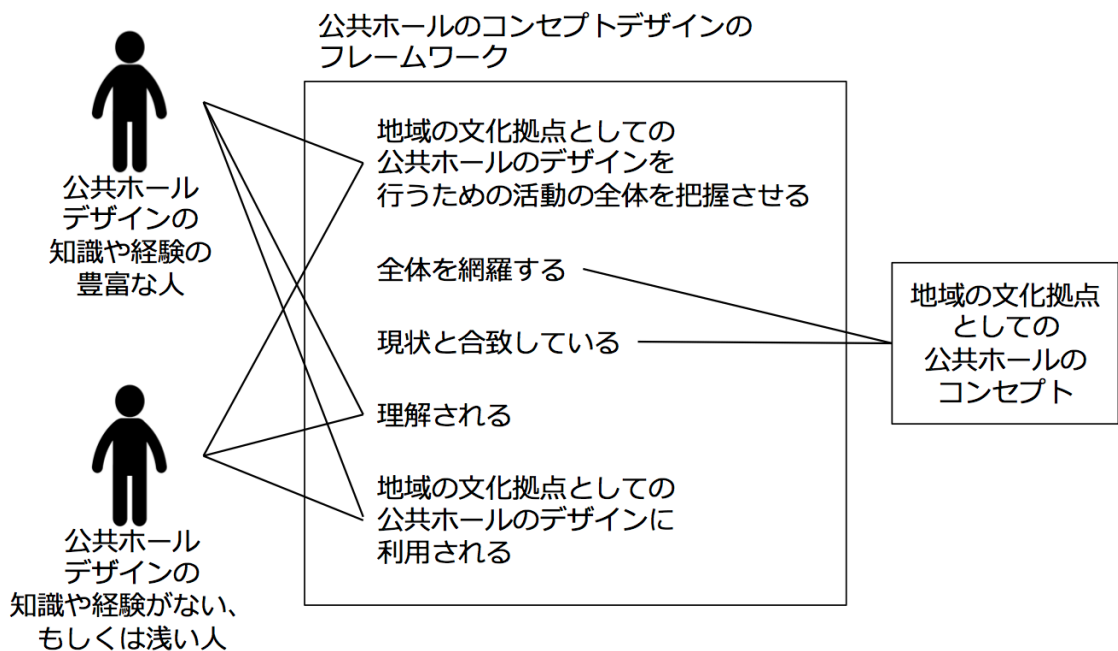


図 4-6 フレームワークのユースケース図

### 4.3. フレームワークの設計過程

#### 4.3.1. 公共ホールを考えるフレームワークの設計過程

本項では、4.1.2 項で説明した「公共ホールを考えるフレームワーク」の導出の根拠について、設計の過程を追って説明する。

「公共ホールを考えるフレームワーク」は、3.3 節で説明した公共ホールの構造分析をもとに導出した。以下にその過程を示す。なお、各設計プロセスの項目は、論文の便宜上順に並べ整理したが、実際には一方向的なフローではなく、プロセスを行きつ戻りつしながら検討を進めたものである。

##### 4.3.1.1. 視点の整理

全体を捉える視点の整理を行った。まず、基本の視点として、「目的」、「機能」、「物理」の三つの視点を設定し、イネーブラーフレームワークに従って、それぞれが「実現する」、「利用する」の関係性にあるとした。

なお、この際の公共ホールの「物理」とは、どのように上位の機能を達成するかという観点に立って設定したもので、形のあるもののみを指した言葉ではない。この二つの視点により、公共ホールの物理要素を網羅的に示せるとした。図 4-7 は、視点を整理した結果である。

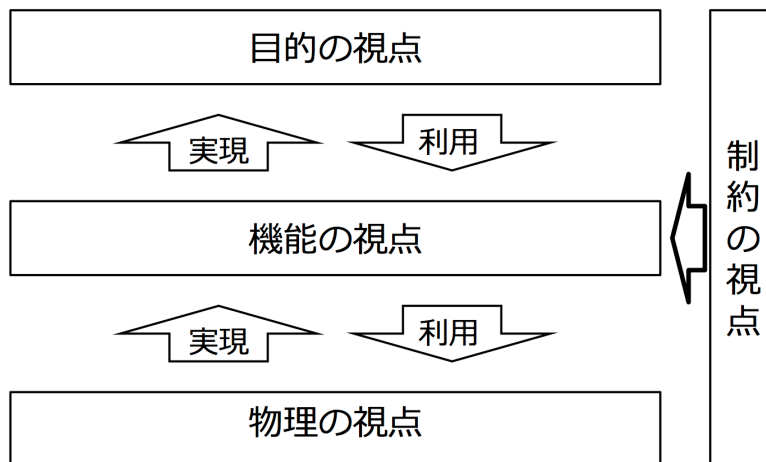


図 4-7 公共ホールのシステムアーキテクチャの基本とする視点

#### 4.3.1.2. 「目的の視点」の検討

「目的の視点」は、「ミッション・ビジョンの視点」と設定した。本研究ではミッション・ビジョンを「地域の文化拠点としての公共ホール」となることとした。

ミッション・ビジョンの視点：地域の文化拠点としての公共ホール

図 4-8 公共ホールの目的の視点

#### 4.3.1.3. 「機能の視点」の検討

「機能の視点」は、表 3-2 の大項目をもとに設計した。図 4-9 はその結果である。また、図 4-10 は、表 3-3 をもとに設計した。

機能の視点						
自然環境と融和する	土地の文化と融和する	創造がされる	練習がされる	発表がされる	鑑賞がされる	交流がされる
誘致する	理解を得る	興味を持たせる	情報の発信・収集	足を運ばせる	見直しをする	建物の維持管理をする

図 4-9 公共ホールの機能の視点設計結果

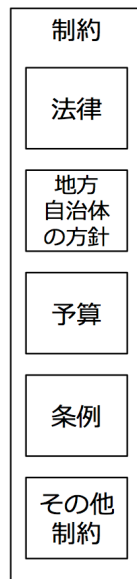


図 4-10 公共ホールの制約の視点設計結果

#### 4.3.1.4. 「物理の視点」の検討

「物理の視点」は、「ハード（施設）」と「ソフト（制度・運営体制）」とした。  
 以上により、「公共ホールを考えるフレームワーク」の設計が完了した。

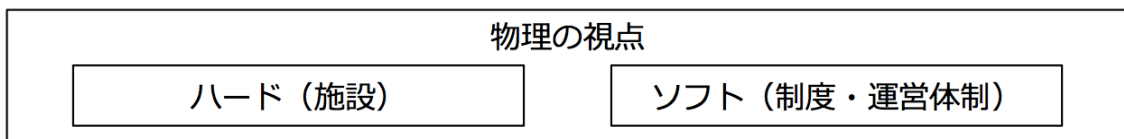


図 4-11 公共ホールの制約の視点設計結果

### 4.3.2. コンセプトデザインチームを考えるフレームワークの設計過程

本節では、「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」の導出の根拠について、設計の過程を追って説明する。

「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」も同様に、3.4 節で説明したコンセプトデザインチームの構造分析より導出した。以下にその過程を示す。なお、各設計プロセスの項目は、論文の便宜上、順に整理したが、実際には一方向的なフローではなく、プロセスを行きつ戻りつしながら検討を進めたものである。

#### 4.3.2.1. 視点の整理

全体を捉える視点の整理を行った。まず、基本の視点として、「目的」、「機能」、「物

理」の三つの視点を設定し、イネーブラーフレームワークに従って、それぞれが「実現する」、「利用する」の関係性にあるとした。

なお、この際の公共ホールの「物理」とは、どのように上位の機能を達成するかという観点に立って設定したもので、形のあるもののみを指した言葉ではない。

全体を捉える大まかな視点が、図 4-12 である。

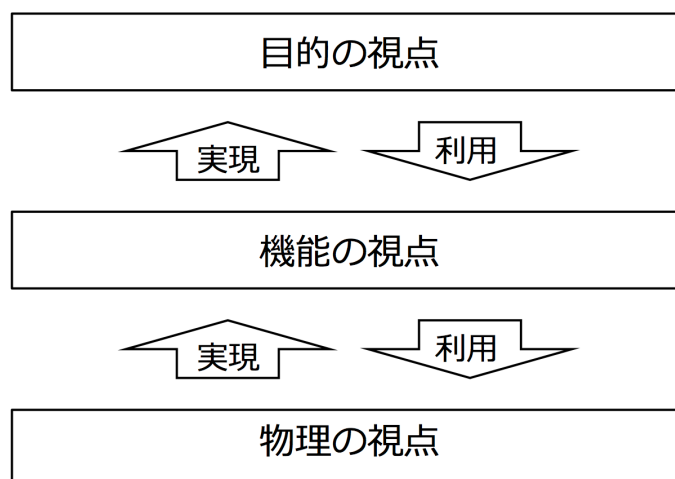


図 4-12 コンセプトデザインチームのシステムアーキテクチャの基本とする視点

#### 4.3.2.2. 「目的の視点」の検討

コンセプトデザインチームの目的は、「地域文化拠点としての公共ホールのコンセプトをデザインする」ことである。

よって、まずそのように設定し、目的の視点をを行った結果が、図 4-13 である。

ミッション：地域の文化拠点としての公共ホールのコンセプトをデザインする

図 4-13 コンセプトデザインチームの目的の視点

#### 4.3.2.3. 「機能の視点」の検討

機能の視点の検討を行った。まず、コンセプトデザインチームは、活動の結果として、公共ホールのコンセプトをつくり出す。そのため、公共ホールを考えるフレームワークのそれぞれの機能を検討する機能がコンセプトデザインチームには必要である。3.4 節

の事例分析に加え、さらに、図 4-14 に示した、基本構想・基本計画ステージにおける公共ホールのコンテキストの分析結果により、利用・サポートステージにはなかったコンテキストとして、「市区町村議会」が挙げられた。

これらに対してそれぞれ検討を行った結果、図 4-15 のように機能の視点が分解された。

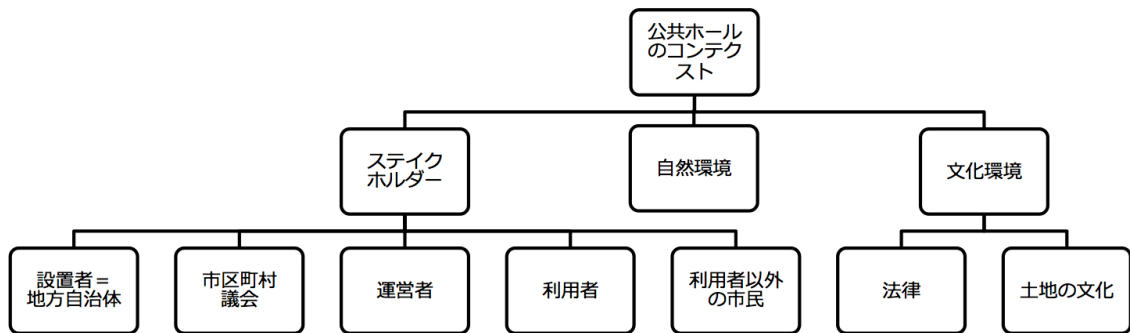


図 4-14 公共ホールのコンテキスト（基本構想・基本計画ステージ）

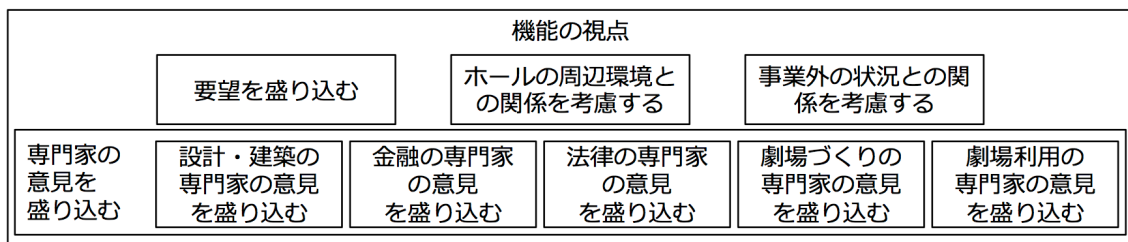


図 4-15 コンセプトデザインチームの機能の視点設計結果

#### 4.3.2.4. 「物理の視点」の検討

コンセプトデザインチームが活動を特定するために必要な項目を仮に「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」「どうやって」と、5W1Hの形で問いを立てるとすると「いつ」「どこで」はその場合によるため除外し、「なぜ」に関しては「目的の視点」「何を」に関しては「機能の視点」でカバーしている。物理の視点で「誰が」「どうやって」の検討を行う。

そのため、「物理の視点」を、「体制」と「手法」に大別した。「体制」に関しては、3.4節の事例分析の結果を基にして、先行研究や書籍より、一般的なコンセプトデザインチームの構成要素を挙げた。手法に関しても同様に、事例分析や書籍より手法を洗い出した上で、まとめあげた。物理の視点の設計結果が、図 4-16 である。

これら、それぞれの視点に対する検討により、コンセプトデザインチームを考えるフ

フレームワークが導出された。

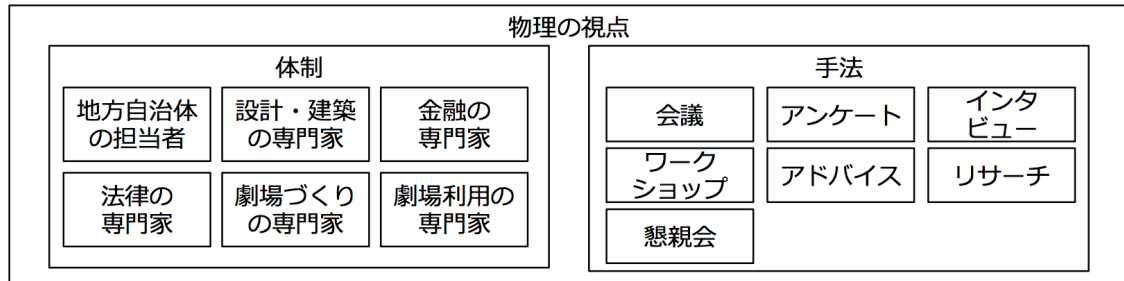


図 4-16 コンセプトデザインチームの物理の視点設計結果

## 4.4. フレームワークの活用例

参考として、コンセプトデザインチームが「公共ホールを考えるフレームワーク」に従ってコンセプトのデザインを行うための「フレームワークに従って考えるガイド」のプロトタイプを設計した結果について説明する。

### 4.4.1. フレームワークに従って考えるガイド

「フレームワークに従って考えるガイド」は、コンセプトデザインチームが「公共ホールを考えるフレームワーク」に従ってコンセプトのデザインを行うためのガイドである。つまり、「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」の中で示されている活動（機能）を、「公共ホールを考えるフレームワーク」の考え方で行うことをサポートし、目安となるようなものである。

ユーザーとしては、コンセプトデザインチームを想定している。

図 4-17 に「フレームワークに従って考えるガイド」の全体像を示す。青で塗られている部分がガイド本体、オレンジで塗られている部分がアウトプットを示している。「フレームワークに従って考えるガイド」は「①要望から機能を明らかにする表」と「②機能を物理に当てはめる表」の二つの表から構成されており、コンテキストからの要求をインプットして、公共ホールのコンセプトの一部をアウトプットする。

アウトプットであるコンセプトに、「(一部)」という表記がなされているのは、フレームワークに従って考えるガイドが、コンテキストからの要求を得る部分においてのデザインのみをカバーしているためである。そのため、このガイドは公共ホールのコンセプトをデザインするために必要十分なものではなく、コンセプトデザインチームを考えるフレームワークの中で示されている活動（機能）を、「公共ホールを考えるフレームワーク」の考え方で行うための目安となるようなものである。



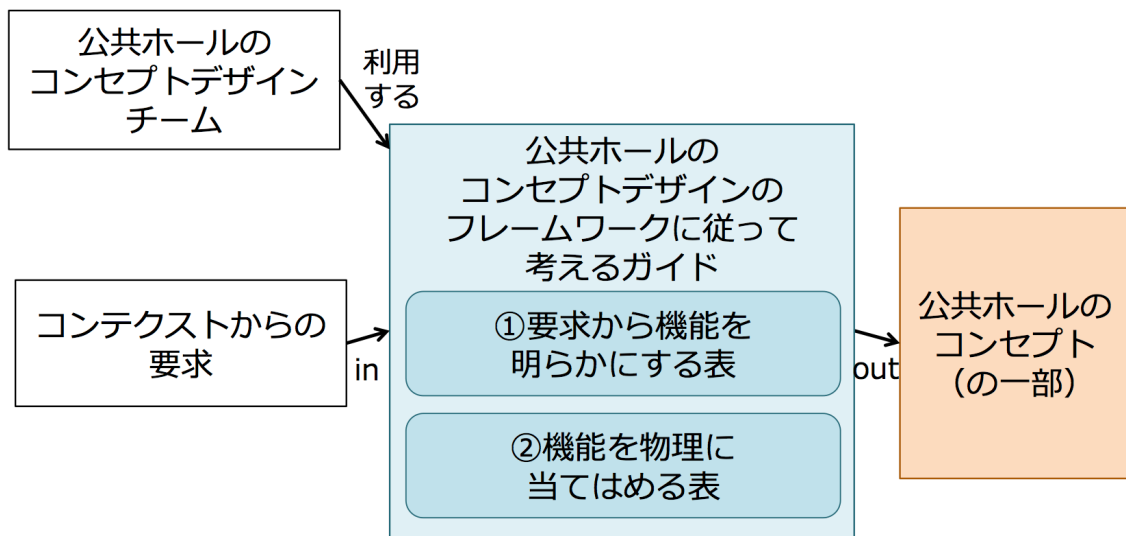


図 4-17 フレームワークに従って考えるガイドの全体像

図 4-18、図 4-19 に示したのは、「フレームワークに従って考えるガイド」の構成要素である「フレームワークに従って考えるガイド表①」と「フレームワークに従って考えるガイド表②」である。

「フレームワークに従って考えるガイド表①」は、表の列の先頭に要望の元となるコンテキストを記入し、表の行の先頭に 1～13 で示した要望から機能を明らかにする観点ごとに議論することで、要望から公共ホールに求められる機能を明らかにするためのものである。

「フレームワークに従って考えるガイド表②」は、「フレームワークに従って考えるガイド表①」で明らかにした機能を表の行の先頭に記入し、表の列の先頭に示した公共ホールの主な構成要素ごとに、どの物理の構成要素に当てはまるかを議論することで、公共ホールの機能の細分化を行うとともに、公共ホールの物理への機能の割り当てを行っていくためのものである。

この「フレームワークに従って考えるガイド」は、「公共ホールのコンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」の、公共ホールのコンセプトデザインチームの機能ごとに活用するようなものである。

		要求から機能を明らかにする観点												
		舞台芸術の創造・練習		舞台芸術の発表		舞台芸術の鑑賞		情報の発信・収集						
		1 場所の提供	2 機会の提供	3 場所の提供	4 機会の提供	5 場所の提供	6 機会の提供	7 情報の発信	8 情報の収集	9 交流	10 公共ホールへの興味をうながす	11 公共ホールへの理解をうながす	12 誘致する	13 アクセスしやすくする
要望の元となるコンテキスト														

図 4-18 フレームワークに従って考えるガイド表①

						①で明らかにした機能					
						A-1	A-2	A-3	A-4	...	
物理の主な構成要素	ハード	建物内	特定の用途のための専用施設	利用者のための施設	舞台芸術に関する施設	【1】ホール					
						【2】その他舞台芸術に関する施設					
						【3】舞台芸術以外を主目的とした施設					
					【4】維持管理に関する施設						
					【5】特定の用途によらない共用施設						
	建物外	【6】公共ホールの専有部分									
		【7】外部との共有部分									
	ソフト	舞台芸術に関する制度・運営体制			【8】自主事業						
					【9】貸館事業						
					【10】その他事業						
		【11】維持管理に関する制度・運営体制									

図 4-19 フレームワークに従って考えるガイド表②

具体例として、「公共ホールのコンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」の「要望を盛り込む」について、「公共ホールを考えるフレームワーク」に従って考えた際の「フレームワークに従って考えるガイド」の使用例を「利用者・市民の要望を整理するガイド」として以下に説明する。

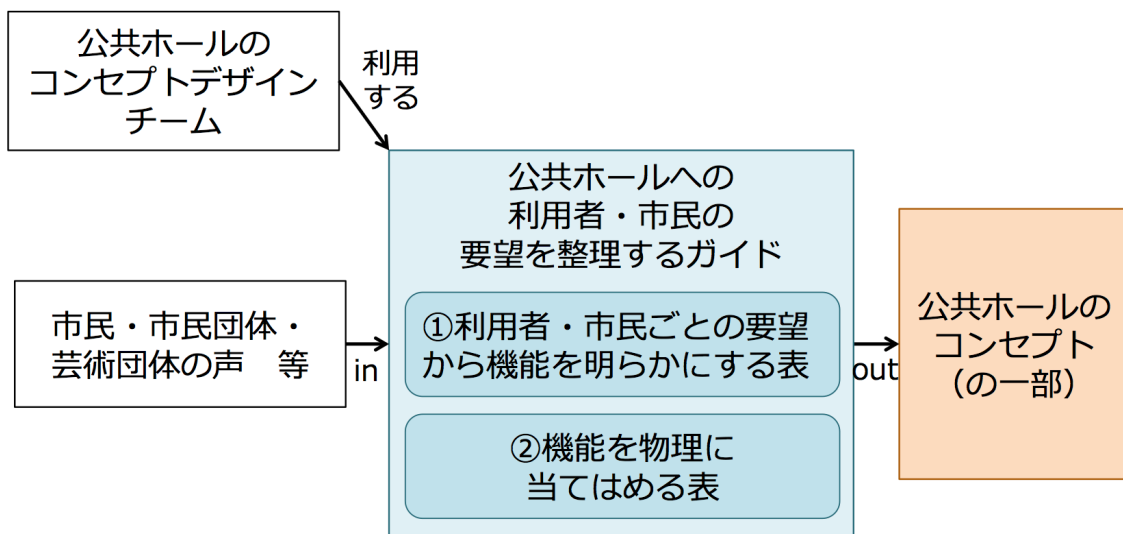


図 4-20 具体例：利用者・市民の要望を整理するガイドの全体像

図 4-20 に示しているのは、「利用者・市民の要望を整理するガイド」の全体像である。

青く塗られている「公共ホールへの利用者・市民の要望を整理するガイドライン」は、「①利用者・市民ごとの要望から機能を明らかにする表」と「②機能を物理に当てはめる表」の二つの表から構成される。コンセプトデザインチームは、「市民・市民団体・芸術団体の声 等」を元にして、ガイドラインに沿って考え、オレンジ色の四角で示した「公共ホールの基本構想・基本計画（の一部）」をアウトプットする。

この例においては、表①の「要望の元となるコンテキスト」に、「利用者・市民の種類」を A～H で示して記入した。この「利用者・市民の種類」と、行の先頭に 1～13 で示した観点ごとに、要望から公共ホールに求められる機能を明らかにしていく。白色で示された部分は、この例において特に考慮すべき枠である。

ユーザーは、以下の流れに沿って、公共ホールの利用者。市民の要望を整理することができる。

- 1) A～H で示された「利用者・市民」に直接要望を聞く。もしくはこれらの「利用者・市民」を想定して計画チームが要望を定義する。同じ枠内にいくつも要望が出ることもある。
- 2) 計画チームは、出てきた要望を採用するかどうかを議論する。
- 3) その要望を満たすために具体的にどのような機能が必要かを議論する。

次に、表①で明らかにした機能を図 4-22 に示した表②を用いて、公共ホールの物理に当てはめる。この表は、列の先頭に【1】～【12】で示した「物理の主な構成要素」と、A-1～H-12 で示した観点ごとに、機能を物理に割り当てていく。白色で示された部分が特に当てはまると考えられる枠である。

ユーザーは、以下の流れに沿って、公共ホールの利用者。市民の要望を整理することができる。

- 1) ①で出した機能を、必要であれば細分化する。
- 2) それぞれの機能につき、どのような物理で実現するかを議論する。同じ A-1 から出てきた機能がいくつもある場合は、それぞれについて検討する。

図 4-25 は、「利用者・市民の要望を整理するガイド」の一連の流れの使用イメージを示したものである。利用例は、付録にも収録している。

# ①ステイクホルダーごとの要望を整理する表

要求から機能を明らかにする観点													
	舞台芸術の創造・練習		舞台芸術の発表		舞台芸術の鑑賞		情報の発信・収集		9 交流	10 公共ホールへの興味を うながす	11 公共ホールへの理解を うながす	12 誘致する	13 アクセス しやすくする
	1 場所の提供	2 機会の提供	3 場所の提供	4 機会の提供	5 場所の提供	6 機会の提供	7 情報の発信	8 情報の収集					
ステイクホルダーの種類	A 舞台芸術を実演する個人												
	B 舞台芸術を鑑賞する個人												
	C 舞台芸術に興味のない個人												
	D 舞台芸術のプロ団体												
	E 舞台芸術のアマチュア団体												
	F 舞台芸術を主目的としない団体												
	G 利用者以外の近隣の市民												
	H 利用者以外で近隣以外の市民												

図 4-21 具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表①

②公共ホールの機能を物理に当てはめる表

		①で明らかにした機能																																						
		A-1	A-2	A-3	A-4	A-11	A-13	B-5	B-6	B-7	B-13	C-9	C-10	C-13	D-1	D-2	D-3	D-4	D-12	D-13	E-1	E-2	E-3	E-4	E-8	E-13	F-5	F-6	F-7	F-8	F-13	G-10	G-11	H10	H-11					
物理の主な構成要素	ハード	建物内	特定の用途のための専用施設	利用者のための施設	舞台芸術に関する施設	【1】ホール																																		
						【2】その他舞台芸術に関する施設																																		
						【3】舞台芸術以外を主目的とした施設																																		
						【4】維持管理に関する施設																																		
						【5】特定の用途によらない共用施設																																		
		建物外	【6】公共ホールの専有部分																																					
			【7】外部との共有部分																																					
		ソフト	舞台芸術に関する制度・運営体制		【8】自主事業																																			
				【9】貸館事業																																				
				【10】その他事業																																				
			【11】維持管理に関する制度・運営体制																																					

図 4-22 具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表②

# ①ステイクホルダーごとの要望を整理する表（記入例）

要求から機能をとらえる観点

	舞台芸術の創造・練習		舞台芸術の発表		舞台芸術の鑑賞		情報の発信・収集		9 交流	10 公共ホールへの興味をうながす	11 公共ホールへの理解をうながす	12 誘致する	13 アクセスしやすくする
	1 場所の提供	2 機会の提供	3 場所の提供	4 機会の提供	5 場所の提供	6 機会の提供	7 情報の発信	8 情報の収集					
ステイクホルダー A 舞台芸術を実演する個人	(市民) ピアノの練習の場所がほしい	(市民) 舞台制作を学びたい	(市民) 発表の場所がほしい	(市民) 発表を試してみたい									(市民) 駐車場
B 舞台芸術を鑑賞する個人					(市民) 子どもが入れる環境	(市民) 子どもを連れてオーケストラを鑑賞したい	・・・						(市民) 駐車場
C 舞台芸術に興味のない個人									・・・	・・・			(市民) 入りやすい雰囲気のエントランス
D 舞台芸術のプロ団体	(プロの劇団) 練習で大道具を使用したい	(プロの劇団) 宿泊の手配をしてほしい	(プロのオーケストラ) 音をよく聞かせたい	(プロの劇団) ○○市で講演を行いたい								(プロのオーケストラ) 魅力的なプログラム	(プロの劇団) 大道具の搬入
E 舞台芸術のアマチュア団体	(地元のオーケストラ) 静かな場所で40人で練習したい	(地元の劇団) 簡単に予約をしたい	(地元の高校) 吹奏楽大会に使いたい	(地元の劇団) 年末にコンサートをしたい				・・・					(地元の高校) バス停車所
F 舞台芸術を主目的としない団体					・・・	・・・	・・・	・・・					・・・
G 利用者以外の近隣の市民										(市民) おもしろい事業内容を知りたい	(市民) 公共ホールの価値を知りたい		
H 利用者以外で近隣以外の市民										・・・	(市民) 綺麗な場所であってほしい		

図 4-23 具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表①記入例

## ②公共ホールの機能を物理に当てはめる表（記入例）

						①から導き出した機能					
						A-1 (市民) ピアノの練習の場所がほしい	A-2 (市民) 舞台制作を学びたい	A-3 (市民) 発表の場所がほしい	A-4 ...	A-11 ...	A-13 ...
物理 の 構 成 要 素	ハード	建物 内	特定の用途 のための専用施設	利用者の ための 施設	【1】ホール			○人規模の発表の場			
					【2】練習室	音楽練習室					
					【3】その他 舞台芸術に 関する施設						
					【4】舞台芸術以外を 主目的とした施設						
					【5】維持管理に関する施設						
					【6】特定の用途によらない共用施設						
	建物 外	【7】公共ホールの専有部分									
		【8】外部との共有部分						...			
	ソフト	舞台芸術に関する制度・運営体制	【9】自主事業		舞台制作を学ぶ機会			...			
			【10】貸館事業				...				
			【11】その他事業								
		【12】維持管理に関する制度・運営体制									

図 4-24 具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド表②記入例



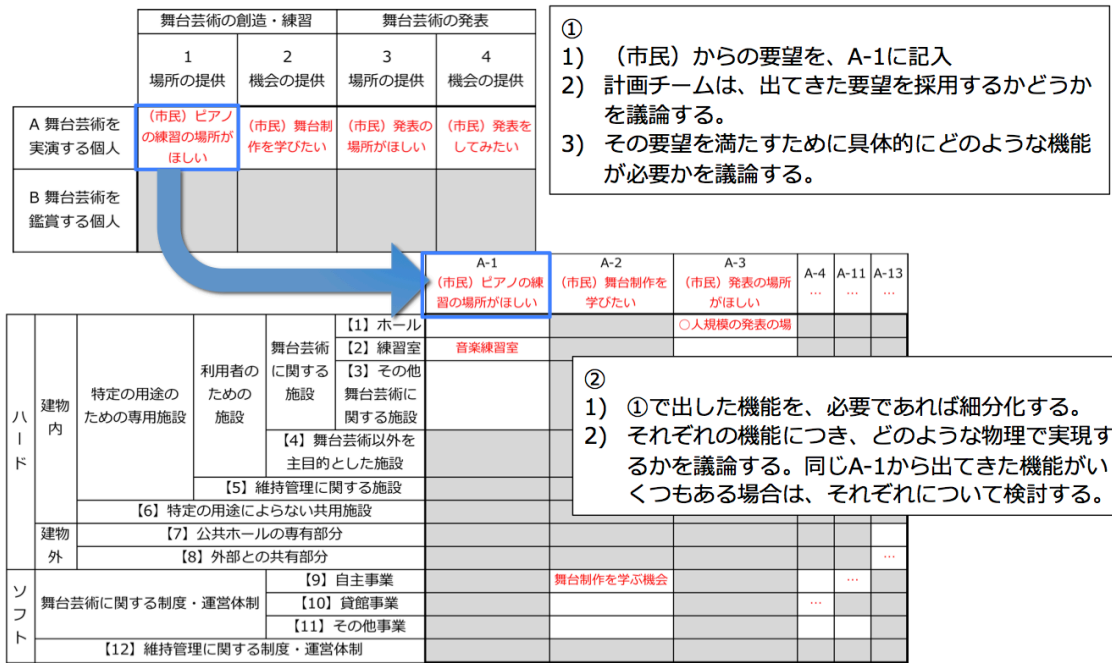


図 4-25 具体例：利用者・市民の要望を整理するガイド使用イメージ

「フレームワークに従って考えるガイド」を活用し、①と②を経ることで、公共ホールのコンセプトデザインチームが、利用者・市民の要望を網羅的に捉えやすく、かつ実際にどのように実現するかを考えやすくなることが期待される。

#### 4.4.2. ガイドへのレビュー

「フレームワークに従って考えるガイド」に対し、想定ユーザーからの表 4-1、表 4-2 のようなレビューが得られた。

レビューにより、フレームワークをサポートするために有効であることが明らかになった。

表 4-1 ガイドへのレビュー（市職員）

対象者	東京都 A 市職員 1 名
<p><b>【評価する点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 使ってみたい。できていること、できていないことが可視化され明らかになると感じた。</li> <li>・ 網羅的に考えることで、どこに一番力を入れなければいけないのか、明らかになったら面白いと思う。</li> </ul> <p><b>【改善すべき点、懸念点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「市民の要望を整理するガイドライン」について、市民の要望、要求は必ずしも技術的に実現可能なことだけではない。また、公平さ、公正さの問題もある。そのあたりをどう担保するのかを疑問に感じた。</li> </ul>	

表 4-2 ガイドへのレビュー（管理運営団体職員）

対象者	東京都 B 区公共ホール管理運営団体職員 1 名
<p><b>【結果】</b></p> <p><u>全体：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 具体的で、項目を個々のホールのケースに変えればすぐに利用できそう。</li> <li>・ 意見への対応漏れがないかも確認できるので良いと思う。</li> <li>・ 相当量の意見をこの表に落とし込むと想像できるので、資料（の紙の枚数）が膨大な量になりそう。そこは現実的ではない。</li> </ul> <p><u>表①：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ とても容易に理解できる。</li> <li>・ 容易に利用できる。</li> <li>・ 市民の活動を網羅的に把握することによりかなり効果がある。</li> </ul> <p><u>表②：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ とても容易に理解できる。</li> <li>・ 容易に利用できそう。</li> <li>・ 利用者・市民の要望をコンセプトに反映することに有効である。</li> <li>・ コンセプトデザインチームの議論を活発にすることに有効である。</li> </ul>	

## 5. フレームワークの評価

本章では、設計結果であるフレームワークに対する有識者のインタビューを要約した上で、考察を述べる。

### 5.1. 評価の目的と方法

評価の目的は、本研究において設計した「公共ホールを考えるフレームワーク」「コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク」が、公共ホールの地方自治体の担当者が、各人の勘や経験の多寡によらず公共ホールデザインの全体を理解でき、専門家と協力して地域の文化拠点としての公共ホールのデザインを行うために有効かどうかを確認することである。

評価の方法は、有識者インタビューによる評価である。

### 5.2. 有識者インタビューによる評価

フレームワークの評価として、公共ホールに関する有識者に対してフレームワークとその適用の事例を提示し、インタビューを行った。インタビューは 2015 年 12 月から 2016 年 1 月に実施した。対象とした有識者は、公共ホールの管理運営団体に所属経験のある東京都職員の方 1 名、東京都内の公共ホール管理運営団体職員の方 1 名、福岡県公共ホールのデザインに取り組むアドバイザー 1 名の計 3 名である。インタビュー内容としては、公共ホールのコンセプトデザインのフレームワークとその適用の事例に関して「評価する点」「改善すべき点、懸念点」を聴取した。

#### 5.2.1. 有識者インタビュー結果 1

##### 5.2.1.1. 属性情報

東京都内の A 市職員で、公共ホールの管理運営を行っている財団にて 5 年間した経験がある。5 年間の間に財団の課題解決に向けて取り組みを行い、定常業務の他に公共ホールの IT システムの適正化、利用者サービス向上と内部コスト削減のための取り組み、財団の労務費、事業費の見直しなどの改革を行った。

2015 年 4 月以降は A 市の文化スポーツ課に所属しながら、同ホールの大規模改修事業に取り組んでいる。公共ホールの計画や運営に関する勉強会に継続して参加する、熱意のある方である。

### 5.2.1.2. 評価結果

表 5-1 は、公共ホールの管理運営団体に所属経験のある東京都職員の方からの評価結果である。

表 5-1 評価についてのインタビュー（市職員）

対象者	東京都 A 市職員 1 名
<b>【評価する点】</b>	
<ul style="list-style-type: none"><li>・ このようなものが行政職員に出回って、意識が高まったら良いと感じた。行政職員は、ここに洗い出されているような項目に気づかない場合も多い。そもそも「公共ホールは市民のためのもの」という定義付けは、あたりまえだけれど大切。</li><li>・ 意識の底上げに良さそう。自治体の職員は、4～5年で異動になってしまう。自分は公共ホールの仕事を5年やったから大まかなことがわかっているが、わからない人は、全くわからない中で、基本構想や基本計画をつくり、30～50億のものをつくることになる。</li><li>・ 基本構想や基本計画をつくる作業に入ったときに、「機能の視点」、「物理の視点」で考えるということは参考になると感じる。</li><li>・ 頭の中でこれは全部考えている。でもこのようにまとめてはいない。</li><li>・ 自分はチームではなく一人でやっている。こういうツールがあると、本来これだけやらなければいけないと上司に言えるかも。</li><li>・ フレームワークを A 市の中で共有してみたいと感じた。</li></ul>	
<b>【改善すべき点、懸念点】</b>	
<u>公共ホールを考えるフレームワーク：</u>	
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 市民がどう関わるか。A 市は市民不在のやり方でやっちゃっている。</li><li>・ 「運営者」が含まれていない。実際には、運営者も計画の中に参加しているのではないか。</li><li>・ 機能の視点は、この 9 種類で集約できているのか。A 市の公共ホールは、学芸員が文化の保護に力を入れ、資料や土器、歴史的な写真を保存した収蔵庫がある。そのようなものはどう含まれるのか。また、例えば図書館が併設されている公共ホールが果たす「知の発掘」の機能についてはどう含まれるのか。</li><li>・ 制約の視点は、ルールももちろんだが、土地の広さや用途も入ってくるのでは。</li><li>・ 物理の視点は、ハードは施設を建築と設備に分けて考えると納得性が上がると感じた。</li></ul>	

公共ホールデザインチームを考えるフレームワーク：

- ・ 「地方自治体担当者」とひとくくりにされているが、実際には財政担当、企画担当、教育担当、福祉担当など様々な立場がいる。自治体内でオーソライズするのにも手間がかかる。その辺りも考慮しても良いのでは。

**【その他】**

- ・ 改修の計画にあたって「基本設計 プロポーザル方式 実施要領」などのキーワードをインターネットで調べ、他市のものを参考にしている。

## 5.2.2. 有識者インタビュー結果 2

### 5.2.2.1. 属性情報

東京都内の B 区にある公共ホールの管理運営団体の職員で、2015 年 3 月まで公共ホールの施設管理の担当部署で勤務をしていた。ホールの予約受付、貸し出し、備品の管理、改修の際の担当などの業務を行っていた。2015 年 4 月以降は同団体の別の部署にて勤務を行っているが、公共ホールの計画や運営に関する勉強会に継続して参加する、熱意のある方である。公共ホールの新設や大規模改修に携わった経験はない。

### 5.2.2.2. 評価結果

表 5-2 は、東京都内の公共ホール管理運営団体職員の方からの評価結果である。

表 5-2 評価についてのインタビュー（管理運営団体職員）

対象者	東京都 B 区公共ホール管理運営団体職員 1 名
<b>【評価する点】</b>	
・ 一部の人の経験と勘で今やっているようなことが少しでも体系化されるのはいいと思う。	
・ 行政側がアドバイザーのサポートの仕方が良いかを少しは分かるようになると思う。	
<b>【改善すべき点、懸念点】</b>	
<u>フレームワーク全体：</u>	
・ やや理解しづらいため、どう利用すれば良いのかわかりづらい。これを見て、自分たちの事例に当てはめるのを難しく感じる。	
・ 自分は前提知識を持っているのでなんとなくわかるが、経験が浅い担当者に内容を理解してもらうにはなぜこれらの項目が必要なのか説明が必要だと感じた。	

コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク：

- ・ 「機能の視点」と「物理の視点」の「体制」とが、ぱっと見では同じ内容なので、違いがよく分からない。

【その他】

- ・ 行政の担当者よりも、大学の先生やコンサルなどのアドバイザーが把握して、行政の人のサポートをしていくのがいいと感じた。
- ・ ざっくり全体を見通しているものなので、業務の細かいところには対応できないと思うが、それを考え始めるとまずは進まないと思うので、細かいことは別の話でいいと思う。

### 5.2.3. 有識者インタビュー結果 3

#### 5.2.3.1. 属性情報

福岡県の C 市で開館予定の公共ホールのデザインのアドバイザーで、館長として就任予定の方である。マーケティングプロデュースや、プロジェクトマネジメントの経験を持ち、ブランドマネジメントなどを行う株式会社の代表取締役として、民間企業、行政を含め数々の案件に携わってきた。

#### 5.2.3.2. 評価結果

表 5-3 は、研究者であり福岡県公共ホールのデザインに取り組むアドバイザーからの評価結果である。

表 5-3 評価についてのインタビュー（公共ホールデザインのアドバイザー、館長）

対象者	福岡県 C 市の公共ホールデザインのアドバイザー、館長として就任予定の方 1 名
<p><b>【評価する点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 水準がなく動いている自治体やプロジェクトも多いと思うので、ボトムアップになると感じる。首長、地元の文化団体などでホールの要件を決めてしまっているパターンはものすごく多いので、それをボトムアップする意味はとても大きい。</li> </ul> <p><b>【改善すべき点、懸念点】</b></p> <p><u>フレームワーク全体：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実際には、期間・時間等の制約要因が大きく、その中で考えることになる。理想論だけ持って行って実際に使えないと意味が無くなってしまうので、要注意である。</li> <li>・ 本当に徹底的に考えるとすると、今より 2 から 3 倍かかるかも。</li> </ul> <p><u>公共ホールを考えるフレームワーク：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ミッション・ビジョン」を考えるのが難しい。何を目的とするのか、それをどうやって合意するのか、どれくらいの時間の射程距離を持っている目的なのかも検討する必要があると感じる。</li> <li>・ 「物理の視点」の「ソフト面」を施設と組織に分けているが、実は組織よりも制度が上位概念かもしれない。</li> </ul> <p><u>コンセプトデザインチームを考えるフレームワーク：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市民参加のあり方は、個別具体的なことを決める際と、ミッション・ビジョンなど長期的なことを考える際で異なると思う。それも考慮する必要がある。ともすれば、「市民から意見を集めた」というアリバイ作りになりやすい。</li> <li>・ 「物理の視点」の「手法」は、長期的なことを決めるのに有効なものと有効でないものがあるかもしれない。</li> </ul>	

### 5.3. 考察

総じて、何をして良いのかが分からないという人にとって、方向性を示す良い指針となるというレビューを得られた。自分としては頭の中で考えてやっていたことが、まとめられたという意見が得られたことは、フレームワークとして整理を行ったことの一つの成果だと言えると考えられる。一方で、現場でフレームワークを活用することを考え

ると、具体的にどのような活動を行えばよいのかが明確でないといえる。これに対しては、公共ホールデザインを見る「視点」というものがどのような意味をなすかのより詳しい説明を行うか、必要であれば、適切な言葉に置き換えるとよいと思われる。これに関しては、より深い議論の余地があると考えられる。

また、各視点の中の項目が実際に公共ホールを考える際に網羅しているのかという疑問が挙げられた。これに関しては、本研究で対象としている「地域の文化拠点」としての公共ホールに関しては除外しているということで、おおよそは説明がつくと考えている。ただし、公共ホールに関わっている人それぞれに「地域の文化拠点」という劇場法で用いられている用語に対するイメージが異なると思われるため、本研究における対象設定が妥当であったかを吟味し、今後指摘を受けた視点を盛り込むことも考えなければならない。

また、フレームワークのユースケースについての指摘がいくつか挙げられた。公共ホールの計画の長いスパンの中で、どのような場面で、どのような人が利用するかについて、より詳しい検討を行う必要がある。例えば、本研究では地方公共団体の職員を一つの主要なユーザーと考えていた。実際にフレームワークを必要としているのは、地方公共団体職員をはじめとした知識・経験がそれほど深くない人であると考えられるが、一方で、仕事量や役割からすると、大学の先生やコンサルタントが活用し、地方公共団体の職員のサポートを行うのがよいというユースケースが得られた。本研究では、フレームワークのアウトプットを公共ホールデザインに対する全体把握の理解向上と考えていたが、地方公共団体の職員自身が用いるためには、より具体的なアウトプットを設定し、利用のイメージをわかりやすくすることが有効であると考えられる。また、公共ホールの目的設定に関して、より詳細な設計が必要であるとのレビューが得られた。



## 6. 結論と今後の展望

本章では、本論文の結論と今後の展望について記す。

### 6.1. 結論

本研究では、今後公共ホールのデザインに携わる人の参考となるための、公共ホールのコンセプトデザインのフレームワークを設計した。その設計にあたって、公共ホールと公共ホールのコンセプトデザインチームをそれぞれシステムとして捉え、そのシステムを捉えるための視点を導き出した。

本研究で設計したフレームワークの評価の結果、フレームワークは理解でき、公共ホールのデザインの全体像を把握するために有効な考え方であるとわかった。特に有効そうな対象として、地方自治体の職員などで、公共ホールデザインの知識や経験が少なく、地域の文化拠点としての公共ホールを志向するという概念自体にあまり馴染みのない人に対し、全体像を理解させ、意識を向上させるという面で有効そうであるという結果が得られた。しかしながら、利用性という面では、どのような場面でどのように利用するかを明示化が必要であるという結果となった。

### 6.2. 今後の展望

本研究では、設計したフレームワークの評価を、過去の事例の分析により行った。今後、フレームワークが実際に公共ホールのコンセプトのデザインに利用できるかどうかを、検討を進める必要がある。その意味で、インタビュー結果からも見られるように、本研究で設計したフレームワークは実用性の面で課題がある。フレームワークを活用してどのように実際のデザインを行っていくかを示す一助として、フレームワークの活用例を示したが、このような活用例を、各視点において考える必要がある。今後は、特定したそれぞれの視点をどのように活用して公共ホールのデザインに生かせるかという点を、検討を進める必要がある。

また、本研究で対象としたのは、公共ホールのうち、「地域の文化拠点」という切り口であり、特に市区町村が設置主体であるものに限定した。さらに、計画のステージとしては新設もしくは大規模改修ということで、ほぼゼロベースで公共ホールデザインを考える場合を想定した。また、コンセプトのデザインに限定した。今後の研究では、この範囲は再検討し進めていく必要がある。

## 謝辞

この二年間、いつも温かく見守り、励ましてくださった当麻哲哉准教授に心から感謝いたします。また、中間発表の際から研究を後押ししてくださり、親身にアドバイスをくださった、副査の西村秀和教授に心からのお礼を申し上げます。

ご多忙中インタビューにご協力くださった公共ホール関係者のみなさまに多大なる感謝をいたします。また、事例として研究をするにあたり、多大なご協力をくださった、福島県いわきアリオスの大石時雄氏、大平淳一氏に感謝いたします。

立教大学社会デザイン研究所のみなさまには、「公共ホールのつくり方と動かし方を学ぶ」2014 冬期集中講座への参加を通じて、研究のアイデアを得ることができたことをはじめ、資料の問い合わせにも応じていただき、たくさんの支援をいただきました。立教大学の研究会を通じてたくさんの示唆をいただいた参加者の皆様にも、感謝申し上げます。

海外発表の際など、研究に対し適切かつご親切にアドバイスをくださった白坂成功准教授、五百木誠准教授、研究の構想の段階から厳しくも優しくご指導くださった石橋金徳特任助教、システムズエンジニアリングを社会科学領域に適用することに関してご指導くださった富田欣和特任講師に、厚くお礼を申し上げます。当麻研究室同級生、寄玉昌宏氏、尾澤知典氏、常本大貴氏、古川洋輝氏、研究室の後輩の方々からは、共に切磋琢磨し合い常に刺激をいただきました。小野塚祐気氏、西野瑛彦氏、原山元希氏をはじめとした同級生のみなさんには、研究に関して多くの示唆やアドバイス、励ましをいただき、感謝の言葉ありません。心よりお礼申し上げます。

最後に、いつも応援してくれる両親と妹、弟に感謝します。

## 参考文献・資料リスト

- [1] 文部科学省：劇場、音楽堂等の活性化に関する法律，平成 24 年法律第 49 号（2012）。
- [2] 糠塚まりや，勝又英明：世田谷パブリックシアターの成立と変遷に関する考察，日本建築学会関東支部研究報告書，Vol 80，No.2，pp. 273-276（2010）。
- [3] 加藤祐貴，清水裕之，大月淳：市内に複数整備された公立ホールの利用状況に関する研究，日本建築学会東海支部研究報告書，Vol 44，pp. 541-544（2006）。
- [4] 公益社団法人全国公立文化施設協会：公立文化会館運営ハンドブック，公益社団法人全国公立文化施設協会（2007）。
- [5] 加藤広祐，清水裕之，大月淳：公立文化ホールの付帯機能・計画性・外部連携・情報活用による類型化と、地域・都市規模による差異の検証，日本建築学会技術報告集，第 17 巻，第 37 号，pp.971-976（2011）。
- [6] 一般財団法人地域創造：「平成 26 年度地域の公立文化施設実態調査」報告書，一般財団法人地域創造，pp.3-4（2015）。
- [7] 総務省：市町村数の推移表（詳細版），  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000283329.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000283329.pdf)（2016 年 1 月 29 日）。
- [8] 長野市：市民会館建設の流れ，  
<https://www.city.nagano.nagano.jp/uploaded/attachment/20023.pdf>（2016 年 2 月 18 日）。
- [9] 黒部市：基本構想とは、設計与件（設計に向けての条件）をまとめる段階，  
[http://www.city.kurobe.toyama.jp/attach/TE/2962/attach/04\(資料4\)全体イメージ.pdf](http://www.city.kurobe.toyama.jp/attach/TE/2962/attach/04(資料4)全体イメージ.pdf)（2016 年 2 月 18 日）。
- [10] 新座市：基本計画、基本設計及び実施設計について，  
<http://www.city.niiza.lg.jp/uploaded/attachment/12593.pdf>（2016 年 2 月 18 日）。
- [11] 半澤政也，内田文雄：地域に開かれたホールの計画・運営手法に関する研究，日本建築学会中国支部研究報告集，第 33 巻，pp.509-1-509-4（2010）。
- [12] 財団法人地域創造：公共ホールの計画づくりに関する調査研究，p.3(2000)。
- [13] 一般社団法人福島県建築士事務所協会，建築設計ってなあに？（平成 22 年度改訂版），<http://www.sekkei-f.jp/about/nani.html>（2016 年 2 月 18 日）。
- [14] 永井聡子：地域の劇場モデルに関する考察-市民参加の可能性について，静岡文化芸術大学研究紀要 12，pp. 67-71（2012）。
- [15] 佐藤信：立教大学大学院社会デザイン研究所，

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/social-design/activity/culture2014.php> (2016年2月6日).

[16] 平田オリザ:新しい広場をつくる 市民芸術概論綱要, pp. 52-60, 岩波書店(2013).

[17] 柄田明美:芸術文化によるソーシャル・インクルージョン-福祉との連携の事例から-, ニッセイ基礎研 REPORT, pp. 16-21, ニッセイ基礎研究所(2007).

[18] 文部科学省:博物館法, 昭和26年12月1日法律第285号(最終改正:平成26年6月4日法律第51号).

[19] 文部科学省:図書館法, 昭和25年4月30日法律第108号(最終改正:平成23年12月14日法律第122号).

[20] 地方自治法, 昭和22年4月17日法律第67号(最終改正:平成27年9月4日法律第63号).

[21] 佐藤信, 中村陽一, 青島琢治, 高宮知数:シンポジウム「明日の公共劇場を考える」, 公共ホールのつくりかたと動かし方を学ぶ2014, 立教大学社会デザイン研究所文化芸術推進事業事務局, pp.97-99(2015).

[22] 高宮知数:劇場法施行, 設備機器デジタル化進行下の公共ホール設計与件の抽出について-福岡県久留米市における事例から-, プロジェクトマネジメント学会, Vol 16, No. 3, pp. 16-24(2014).

[23] 坂口大洋, 小野田泰明, 菅野實:群馬音楽センターの実現化要因と計画経緯の先駆性, 日本建築学会計画系論文集, 第612号, pp. 21-26(2007).

[24] 坂根奨, 今泉佳祐, 前田明継, 加藤広祐, 勝俣英明, 本杉省三, 大月淳, 清水祐之:劇場・ホールの問題点と大規模改修について-劇場・ホールの改修実態に関する研究(その4), 学術講演梗概集2012(建築計画), 一般社団法人日本建築学会, pp 263-264(2012).

[25] 日本建築学会:公共施設の再編-計画と実践の手引き-, 森北出版(2015).

[26] 建築思潮研究所:建築設計資料18 劇場・ホール, 建築資料研究社(1987).

[27] 谷口汎邦ら:建築計画・設計シリーズ, 市ヶ谷出版社(2014).

[28] The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc.: IEEE Std 610.12, Standard Glossary of Software Engineering Technology(2002).

[29] ISO/IEC/IEEE 15288: Systems and software engineering – System life cycle processes(2015).

[30] INCOSE: Systems engineering handbook a guide for system life cycle processes and activities(2015).

- [31] いわき芸術文化交流館：コンセプト，<http://iwaki-alios.jp/about/concept.html>（2016年1月27日）.
- [32] ニッセイ基礎研究所（いわき市委託調査）：いわき芸術文化交流館 ALIOS 事業運営評価調査・マーケティング調査 [報告書]（2009）.
- [33] 立教大学社会デザイン研究所：平成 26 年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業「劇場法の要請に応える、公共劇場スタッフのための社会デザイン力要請講座-地域コミュニティ、共生社会、絆を生み出す場所と事業のマネジメントを学ぶ-」公共ホールのつくり方と動かし方を学ぶ 冬季集中ワークショップ：立教大学社会デザイン研究所（2015）.
- [34] いわき市：いわき市文化交流施設整備等事業実施方針（2003）.
- [35] いわき市：いわき市公告 141 号 特定事業（いわき市文化交流施設整備等事業）の選定について（2003）.
- [36] いわき市：いわき市文化交流施設整備等事業募集要項（2003）.
- [37] いわき市：いわき市文化交流施設業務要求水準書（2003）.
- [38] いわき芸術文化交流館：コンセプト，<http://iwaki-alios.jp/about/concept.html>（2016年1月27日）.
- [39] 立教大学社会デザイン研究所：公共ホールのつくり方と動かし方を学ぶ CASE STUDY，立教大学社会デザイン研究所文化芸術推進事業事務局（2015）.
- [40] Shirasaka, S: A Standard Approach To Find Out Multiple View Points To Describe An Architecture Of Social Systems—Designing Better Payment Architecture To Solve Claim-Payment Failures Of Japan’s Insurance Companies, INCOSE Symposium, 19(1), Wiley, pp. 490–500(2011).